Jun. 1892
no. 321-2

女學雜誌

第三百二十一號
乙の巻

明治二十五年
六月廿五日發兌

注意

論説 十九世紀の勳爵士 明治年代の武士何處にあると題するもの幾多義俠の同志者を喚起すべし

の小萬の評は深く涙六氏從來第一の著作を推重すると共に俠さと云ふ者の短所を指摘し其美を完ふするの一助となす

痣留

の新作小説は「ひさご」女史が上下讀切の短篇近來現實の出來事を假りて可憐の情を寫

園女の傳 並に コロムバス 人の傳は余り世上に聞えざりし美事を顯揭す

遺ひ物の情けは俗禮虚式の弊を戒しめて情交際の眞味を掬せしめん

阿佛尼の歌十六首の撰は文藝の助

ホーム建設に付きての樣々の心得は佳入才子初て家を持つの參考たり

女學

講義録は彌よ本號より附錄とせり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 321. JUNE 22nd. 1892.

EDITORIAL:—The Knight of the 19th Century.
CRITICAL NOTE:—"Yakko-no-Koman" (A Biographical Novel).
CHILDREN'S COLUMN:—"The Flower of the Family." (Wakamatsu Sidsuko).
NOVEL :—"Aza-bannin."
BIOGRAPHIES:—Wife of Christpher Columbus; Sono.
FRAGMENTS FROM NOTED AUTHORS:—Health of Female Students; Facility of Speech in Present Noted Speakers; Sanitary Conditions in Elementary Schools; Manners and Characteristics of Modern Girl Student.
DOMESTIC :—Home Building; Housekeepers' Meeting in Columbia.
MISCELLANOUS: Sentiment expressed by a Present: Where in Men and Women differ (A Poem)
ART AND LITERATURE :—Eighteen Sonnets by Abutsu.
CONTRIBUTED ARTICLES :—A New Style Presents; Usher and Host; Reformed Diet.
QUESTION AND ANSWER :—Ukali; In Pursuit of Spring; Spirit and Characteristics nurtured in Girls' Schools.
CONCERNING WOMEN:—

本號（第三百廿一號）目次

●論說　十九世紀の勳爵士
●批評　「奴の小万」を讀む（是空子）
●兒籃　吾宿の花（若松しづ子）
●小說　慝番人（上）ひさご
●史傳　コロムバス夫人〇園女
●拔萃　女學生の月經〇當世辨士演說速變概覽〇三島通良氏の學校兒童の衞生〇教育結論の女子の風儀
●家政　ホーム建設心得〇コロムビヤ家政會の報告
●雜錄　遺ひ物の情〇男さ女さの相違の詩
●文藝　阿佛尼詠詞十八首
●寄書　遺ひ物新發明〇取次に主人〇改良衣に就ての懇願
●問答　ニーカリ樹〇女學生の精神さ氣風〇迎春行
●女報

前週（第三百廿一號）白表

●社說　人生大時機〇慣習一新小策
●論說　東花坊、我を刺激す（天知子）〇ジョージ、エリオットが小說中の女主人公（無名氏）
●小說　人さま〴〵（第一、文學者のホーム　若松しづ子）〇紅樓夢の一節（風月寶鑑の辭）無名氏。
●批評　巢林子が歎念佛を讀みて（透谷）
●雜錄　天地管見（倫理神理の講究。兒に對する愛。事業成否鑑識の法）
●時事　副島伯〇同胞の出稼人〇時事片々
●寄書　青年何ぞ老ゆるとの早き（文醜眞逸）〇前赤壁賦の和譯（立花寛篤）
●附錄　教育學講義（教育さは何ぞや）

前々週（第三百二十號）赤表

●社說　滔々たる世上の母、多くは其愛子を殺す
●兒籃　吾宿の花（第四回中）若松しづ子
●雜錄　鎌倉に妹を想ふ（暗光子）〇女子教育に於ける經歷及經驗（櫻井ちか子）
●史傳　賢母の贊（ナポレチンの母、アウガステンの母、カーライの母。
●家政　早起快然
●批評　「香蘭之女子教育」の序
●拔萃　ごもりの匡正法
●寄書　脚氣預防法〇無錢馳走の秘傳〇臭氣さ泥棒さの關係の考〇はシヤム〇米の直段〇夏を涼しくする法〇節儉々約〇清
用紙
●開書　米國の通信（山脇花子）
●女報
●孤友　同志社病院に於ける石井十次君〇孤女學院報告

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿一號
明治二十五年六月廿五日發兌

論說

○十九世紀の勳爵士

明治年代の武士、何處にある　山月子

編者再たび大坂に行く、社說未だ成らざる時、左の一文を寄せらる。此文の起草者は、空を擊つて戰ふにあらず、目前現に泣くべく憤ふるべきの事實を見て、眞個に當世の義俠者を召び起す者あり。則はち收めて論說となし本號に限り社說を畧す。而して此文の大意は社中吾黨の深く同情を表して、熱心に共に祈望する所ろのもの也。

このごろ切に感じ、日本の姊妹ほど可憐の地位に立つ者あらずと、試みに足を田舍に轉ぜよ、湖處子が如何に飾りて記するも、掩ふべからず、隱すべからざるの淫風吹きしきるにあらずや、妙齡の處女、學無く智無く、德操堅からざるに乘じて、彼の狼の如く狐の如く豕の如き心の若者等は、其羊の如き柔和の假面を以て、之を欺き之を惑はし、節を破り德を滅せしめて恬然怪むとなし、此輩の眼中、決して女子といふ人間無したゞ、一の玩弄物あるのみ、雲の爲めに月を惜み、風の爲めに花を傷むの情あるもの、暴を碎き弱を助くるの心あるもの、嚴肅に人間を敬愛するもの、誰か憮然として胸を撲ち、慨然として憤を發せざらんや、數百の村戶、貞淑を以て聞ゆるの女子、實に五指を屈するにたへず、嗚呼豈多言するに忍びんや、

男子に眞實の義俠心無く、女子に堅固の德操無し、彼等の生涯、神聖なる戀愛を知ると無く、神聖なる夫婦の情を知ると無し、戀愛といひ、夫婦といふ、必ず不潔の觀念伴ふ、是れ豈百年の遺恨のみならんや、其獸慾の爲めに結婚する者は、吾人之を言はざるべし、其中高尙なる考にて妻を娶るてふ者の心を聞くに、曰く主義の爲めに內助を得んと欲すと、內助とは何ぞや、妻をして內に在りて我を助けしめんとの謂にあらずや、即ち一の利己心なり、己を助くるを、己の意に滿たざれば、豈妻を疎むの念生ぜざる理あらんや、

吾人は自由主義の政治家にして、內助の爲めに妻を迎へし人を見たり、而して彼れは運動と稱して多く外出し、可憐の妻

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

君をして、厄介多き心配多き留守宅に苦惱せしめぬ、而して猶内助の足らざるを思ひ、之を遇すること酷、彼女は爲めに痩せたり、之を兄弟に計り、之を親戚に計る、彼等は皆たゞ忍べとのみ言ふ、一人の同情を寄する者なし、空閨獨り泣きて雞鳴曉を告ぐるを覺へず、義膽の男兒聞て之を憐み、夫妻の間に立ちて人知れず盡力する所ありたり、社會腐臭、利己の動物多き際、彼の男兒は、爲めに其家人より疑を受けたり、たゞ彼は斷信して盡力し、其疑ひ自然に無言に解け、其夫なる人、彼の言を幾分か容れて、以前に比して多く家に在るに至れるも、妻君の心は未だ悲愁を脱すると能はざるなり、而して其家人が彼の男兒を疑ふの念は、未だ全く消散せざるにや、彼が此妻君を憐むの餘り『君を見ると姉の如し、弟として出來るだけの助力をなさん、安んじ給へ』と言はんと欲せしも、傍ら常に人の在るあり、たゞ此一語をだに發すると能はざりしと云ふ、

又一女ありき、彼れ貧困の中より出で、勉め學びて一かどの人物とはなれり、毅然の精神、人之を感ぜり、惜むべきは、彼れ財産、門地、學位、名聲等を崇拜する心あり、一靑年頗る女風改良に意あり、以爲らく此女子若し眞に誤りを棄てゝ道を信ずるに至らば、以て幾多の婦女を導くべしと、屢々爲めに書を寄せぬ、何ぞ圖らん、靑年は道ならぬ情に迷ふ者と誤解せられしが如し、而して一年有餘の歲月、一回の返信だも得ざりき、されど靑年は心に自問して、自ら淸潔なるを信じ、正義なるを信じ、忍びて猶書を贈りたりき、俄然一報に接せり、曰く『此度議員某氏に嫁せり、此上は何卒親しく御交際を乞ふ』と、彼女は父母に孝養せんとの志の爲め、自己の名譽心を滿足せん爲め、門地と財產と名聲とに結婚せり、吾人今に於て何をか曰はん、吾人は彼女のホームの益々淸く麗はしからんとを切望するのみ、

『爾の品行を亂ると勿れ』の消極的訓戒は、よく其父母の愛孃に敎ゆる所なり、されど吾人は之を確信す、藍より出で丶藍より靑からんとを望むは、親の子に對するの情なり、乃ち寧ろ『我が品行を高潔善美ならしめん』との積極的希望を持つこそ眞の孝子といふべきなれ、偶々謹愼の女子は、妄りに人を疑ひ、縮小にして、進步誠に遲々たり、

快活にして交際好みの女生、多くは內に修德堅からずして、

輕浮卑劣の男子に誤まられ易し、

信仰あり定見ある女子は、婚を結ぶに當りて多く父母の抑壓を受く、孃の望む所は其人物にして、父母の望む所は其人の容貌、才學、門地、財産、名聲等にあり、父母の親切は却て仇をなし、孃を强ひ、孃を制して、多くは其生涯を不幸悲慘の中に沈ましむ、嗚呼『人の敵は其家の者なるべし』宗敎により、敎育によりて、信仰と定見を有し、立派なる心を持てる姉妹こそ實に言ふべからざるの苦痛あるなれ、嗚呼何人か之に對して同情の涙を濺ぐ者ぞ、

一片の丹心、之を思ひ彼を思ふて、中夜獨り慟哭す、點燈危坐、枕邊の聖書を開きて、左の句を得たり、

『凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したるなり、もし右の眼なんぢを罪に陷さば抉出して之を棄よ蓋五躰の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり、もし右の手なんぢを罪に陷さば之を斷て棄よ蓋五躰の一を失ふは全身を地獄に投入らるゝよりは勝れり』

『愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり愛は妬まず誇らず驕傲らず非禮を行はず己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず、不義を喜ばず眞理を喜び、凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり』

『愛は律法を完うす』『愛は衆德の帶なり』

嗚呼男女の愛、夫婦の愛をして、基督の聖旨に合ふものならしめずんば、決して我が不幸可憐の姉妹を救ふと能はざるなり、若し之を救ふと能はずんば、此滔々腐敗に沈むの日本國を奈何せん、今は實に義人の泣くべき時なり、而して今は實に義人の知られざる時なり、即ち義人の最も困難なる時なり、然り、困難あればこそ義人の大に奮ふべき時なれ、無腸無節、獸慾の奴隷となりて處女を誑かすの動物は、吾黨の退治し濟度すべき者なり、軟骨柔腸、義を見て立つと能はざるの輩は、吾黨の叱咤警醒すべきの徒なり、洗禮を受けたる明治の武士、今焉くに在る、何ぞ來て吾等の軍に投ぜざる、爾の俠骨を揮ふは實に今の時なり、

不幸の男兒、不幸の時に生れて涙常に乾かず、嗚呼此鉄腸より出づるの涙、余は決して余の涙に非るとを信ず、皇天上帝よ、若し日本の姉妹を憐まば、請ふ吾黨の同志をして死せしむると勿れ、吾人は爾の前に嚴かに之を祈願す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

「奴の小万」を讀む

是空子

むかしの「我」を追憶し、ほゝえみて、ちぬの浦浪六氏が「奴の小万」を讀む。舊友に會見して其上を語るが如し。一種の快味あり。浪六氏つねに此般の題目を擇む、從來その著作せられしところ、大率ね遊俠を材とせざるはなし。然れども、尤とも眞俠に近きものを穿ち、其出所を尋ね、其高く懸くる所ろを表白せる、凡そ前著にして此に及ぶものあるなし。「三日月」は「女之助」に及ばず、「女之助」は亦た「奴の小万」に及ばず。此書は俠を寫さんとせる浪六氏が著作中の最とも高きもの也歟。

「奴の小万」を通讀せんとするものは、先づ百六十頁の末、結尾千斤の一句を味はうを要す、云く、

七十五年の一期や、浮世に殘す形見を何ぞと問はゞ、この女性が寢覺の思ひにも心に耻づる名を唄はれて「奴の小万」。

又た、

たゞ偏へに恐る何時しか天女下界に墜落して塵に埋もれ塵に強撥かんとを、しらず彈出す世の調子に乘らで一生を我まゝの亂舞に唄ふものは、そも其人の狂か將た世間の狂か

(三八)

之に續ひで名句あり。さるにても我を幼時の雪と思ふての言振、あな笑止、いでや二十歳になりし此の方た何所の里に育ちしか敎えやらんと、客氣一迸せる后瞬刻、俄かに耻ぢて厭ふが如く顏背けながら憤怒の底に冷笑へる瞳を流眄にジロリと呉れて「これ浦、……。(一三八)

お浦と思へばこそ御腹も立てど、あれは、犬、猫、狐、よりも遙かに劣つた獸が人間の皮を着て居るばかり、お打ちなされた杖は水で妾が洗ひませう、汚らはしい。(一四〇)

この一退冷笑の所ろ、この半蹴放念の所ろ、俠の中のやゝ優れたるものを寫すなり。

俠客の必要せらるゝ時代は歎くべき時代なり、俠客傳の愛讀せらるゝ世の中は好き時にあらず、況んや俠を以て任じ俠を以て誇るが如きは、人生秀麗の道念にはあらざる也。左れど俗物動き、正者困しめらるゝ世に於ては、男丈夫、女丈夫、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たれか一片俠骨の動飛躍するを覺えざらんや。たゞ願はくは俠者が經綸を立て慈悲心を擇ひ、大觀して、世を汎濟するの工夫を爲さんとにある耳。與を以て人を渡すは大仁にあらず、西國の狂ワヨン、ブライトは釋然として悟れるとあり。されど、片々たる木葉小說俗男俗女の氣受に歡迎せらるゝ時、淚六氏が慨然として此類の著作に任ずるを、至つて壯なりとす。而して此流小說が愛讀せらるゝに至らんとは、今の時に於て吾黨が熱望するところ也。

終に於て、淚六氏が得意の奇慧なる秀句を示す、

もし夜具に魂魄あらば枕並べて壓殺されんに（二六）

島原の太夫樣が一年うち任せての賣色に七百兩は安價いもの、おさらば〳〵、やれ色男の宗さま、浦より。

笑渦の深さ量つて踵の垢を埋めてやらんに（七〇）

すご〳〵として歩み出す婆は骨ばかり、さながら濡紙張れる竹細工を見るが如し（七〇）

さら〳〵宗兵衞が口よりいふでなし、木津屋代々の祖先が言葉ぞ、出かし居つた（七七）

元龜天正の餘波りの嵐に連れていくその武者が屍を曝した る大坂城も今は堀の漣漪に魚馴れて落花を追ひ石垣に住る蟹さへ親子兄弟鋏を硏がず。（七八）

事に觸れ物に感じては一文字に鐵板を貫ぬく炎焰、この少女が心の底に深く沈んで我すら知らず、たゞ飾らぬ言葉に天眞の筋たちて怜悧の鋒鋩を溫雅の性に包むとは万人等しく見るべし。（八二）

花なければ銀の平打に櫻を彫れる我が簪を抜きて杌の上なる墨壺の水を注ぎかけ、（一一四）

とりや万、其方は天下の英雄じや、血氣の勇士を一腕の下に殺すのみか、大坂城代松平伯耆守まで茶店の行燈害に致し居つたは（一二七）

卷中の副主人、城代と老女とに昔しを慕はぬ人は、武士の面目を知らぬ人なり。

次週の白表には、天知君が、此背の評あらんと待つ、君には手のものなり。余は許せしと云ふ程にあらず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

吾が宿の花

若松しづ子

第五回　（下）

さうかふする內、グラント主人も午飯に戻つて參り升た。これは朝から外出して居つて、家に椿事の起つた事は一向知りませんでした。先づ赤子の安否を問ひ、妻を慰めに產處へ這入り升た。妻は夫の尋ねにこたへて

ハイ、子供たちは本に音なしくつて、深切して吳升よ、かうして寐て居り升ても、子供たちがこの樣に樂しみになるのですもの、どの樣に感謝しても好いと思ひ升よ。この子（赤子を指す）も亦た余程好い子だと思ひ升よ、これ程逞ましいのはこれまでない程ですから、あなたとわたくしと老後の杖にならないとも申されないと思て居升たのですよ。

平常至極素面目で、打興じることなどは甚だ稀なグラント主人でしたが、妻のかふいふ言葉を聞いて、大吹出しに吹だした聲は隣室に居た子供たちを一同寢室の戶口まで引付ける位でした。

イヨー！廿四時間も經ぬ生子の器量定めは奇妙千万だ、が末子といへばみんなお袋には非凡に見へるさうだよ。

グラント夫人も共に笑ひ升た、腕枕させた小さな頭を愛敷眼付して眺めつゝ

こんどこそは私のいふことに間違は有ませんから、見て居て御覧遊ばせ。

といひ升た。ルーセは父の萬を忘れて打興じるなどのことは稀に見ることでしたから、尙さらアーサに出來た事を告げて驚かせるを辛く思ひ升た。併し食事の時にアーサの居ぬに氣付かれるは必定のことで、報告を延引したとて何の益もなきことと、心を定めて、一寸と傍へ招き、成る可く落着いて、事の顚末を語り升た。一時立退いて居た心配さうな父のおもゝちが直ちに元へ戻つて、晴天に雨雲の蔽ひ掛るが如くでした。併し何事も口には出さず、直ぐアーサの側へ行き升た。

ルーセは父の側に佇んで居る處を見守つて、光線を遮る爲に窓を閉ぢた室の暗黑に眼が慣れ升と、ハテが向ふの隅に坐を占めて、忍び音に泣て居るに氣付升た。

ハテさんは二階で寐ておいでかと思つてましたよ。

と小聲で言ひ升た、

エー、少しの間寐たとは寐升たが、恐ろ敷夢を見て目が醒めて、それから下りて來たんです。

此時父は室の外へ出て、ルーセを手真似で側へ呼び寄せ、

子供たちに午飯を食はせたが好いよ。わしには管はないで。

アレおとう様、少しでも召し上つて下さい升な。私たちを安心させると思召て。

わしはこれからホワイト(醫師の名)の處へ行つてあれに付ての見込を聞いて來る積りだ。

併しモウ直きにお出になり升。それに、午飯の時も過ぎて居り升から、夕部は夕部であの通り夜更しをなさい升たもの、サア、どうぞさう遊して頂戴。

父はルーセに引るゝまゝに食卓に着升た。そして、ルーセは向ふの倚子へ腰掛升て、ルーセの顏色のわるいに始めて氣がつき升た。それで、

おまへもどの樣なとになるか知れぬネ、今でさへ疲れ果てゐる樣だから。

いゝへ、おとうさま、そんなでは御座いませんよ。最初にはそれこそビックリ致し升たよ、アーサの顏が眞靑でしたもの、モウ絶息て居るかと思つたとも御座い升た。それにおつかさまは平臥入つしやる、おとうさまはお留守といふのですから…………、

姉さんはアーサ兄さんに蛭着けたの、自分一人で………

とトムが突き込み升た。

ナニ、蛭を、誰に聞いてしたのだへ?、

誰にも伺ひはしませんが、どふかしなければならないと思ひ升て、どこかでそのとを讀だと思ひ升たの。

どふも何事も一處だから困るよ。

と父がさも落膽したといふ顏貌でいひ升た。

併し草刈の時分でないが、切めてもの幸ですネ。

とルーセが言升と、父が始めてホヽ笑むのを見て、ルーセも稍く少し慰み升た。

夜に入つて、醫師が廻診され升た時、アーサの容躰が餘り氣に叶はなかつたとルーセは思ひ升た。

みんなが此室へ出たり、這入つたりして、泣たり饒舌たり

したのですか、

と尋ね升た。ルーセは室は極く靜かになつて居つたと保證し升た。

今夜の計畫はどうです、

と醫師が問ひ升た、父は

兎に角ルーセ丈はどうしても起しては置ません。

どう致して、ナニ、今其事を承つた譯は不幸にもアーサさんを傷けた壯年の中の一人が非常に心配して、御樣子を尋ねて居升たが、今夜は是非共お側で看護がさせて貰ひ度と申込んだのです、其人といふは看護は手慣れて居る方で、實は外からお呼になつても間抜けな女などよりは餘程私には勝手です。

ホワイト氏は此家族には餘程信用されて居る樣子で、アーサの看病を見ず知らずの人に依托するとは好ましからぬと誰しも思ながら、その言葉に反對する者は有ませんかつた。それに家族の者は皆疲れ果てゝ、休むとが必要でした。

ルーセは母を見習つて、醫者にうるさく問立はしませんかつたが、ホワイト氏の平常の樣子をよく知つて居て、此時アーサのとを氣遣つて居るとが分り升た。此人は心配があれば殊さら輕く磊落な風采を裝ふ僻が有升た。それにアーサは少さい時分から可愛がられた方でした。今談話も濟んで、父と共に病室を離れ升た時、ルーセは後に殘つて、消入る樣な心地がし升た。恐〳〵ながらソツトアーサの手を握つて見ると、熱く干いて居るのに驚ろき升た。そして、暗がりにもアーサの双の頰が熱發の爲に朱を注いで居る樣でした。我知らず持つた手の上へハラ〳〵と淚を落し升たが、アーサは夢中で更にそれを管ふ樣子もなく、氣も付きませんかつた。ルーセは悲しさ遣る方なく、アーサがモ一度物を言つて、自分を愛すると言ふて呉れたら、其まゝそこで死んでも恨はないと思ひ升た。併し幼少の折から妄像する暇さへなかつた通り、今も悲嘆の暇がなく、心に大きな重荷を擔つて、家族の居る處へ歸り升た。此時リベカはルーセの來るまで寢ぬとだゝを担たホレスの吾儘を辛捧してなだめて居る處でした、それ故、自分がホレスを請取つて、リベカをハテの代りに病室へ遣はし、自分はホレスを抱いて、低い腰掛へ坐り升と、ホレスも漸く靜まり升た。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ホレスはモウお夕飯頂いて？

と尋ねると、ホレスが、

いゝへ坊たべない。

アレ、御飯はモウたんと食べたの、僕見てた處でリベカ姉さんが遣つたもの、

とトムがいひ升た。

寐くつて〳〵、自分のいつてるとも分らないのだよ。

とルーセがいつて、優しげにホレスを抱いて、母へお休みなさいといはせに行き升た。母の側に赤子の寐て居るのを見て、寐ぼけ聲に

坊、モウ兄ちやんだ！

そこでルーセはホレスを自分の部屋へ連れて行つて、床の上へ好い鹽梅に寐かし升た。ホレスをねかしつけたらばいつも讃美歌を歌ひ升た、これは自分寻りは一廉の兄さんの積りでも、まだずぶの赤子で有つたからでした。今夜はいつもの通り歌ひ始めると、聲が震へ出して、涙にむせび升た。これではならぬと、ホレスの側へ突伏した我身を我と引立て、双の手をシツカリ握りしめ、涙を推し反して、堅く決心をし升たが、此少女の決心は求めて得られないとは有ませんかつた。それ故、其あとでは情が幾度心の中を騒がせても、眼に涙は有ませんかつた。ホレスはルーセが靜やかに歌ふ讃美歌にスヤ〳〵と寐入りつき升た故、ルーセは夕飯の仕度に下へ下りて行き升た。ホワイト先生はまだそこに居て、アーサをモウ一度見に來て夕飯を共にする事を約した處でした。此時グラント主人が

伜どうして出來たとだか、まだ緩くり聞なかつたが、

といひ升と、醫者が

なに、アーサさんがお家の方を一人、たしかハテ嬢でしたらう(と冗談をいひ)、橇へ乘せて、引いて歩いて御座つたのです、スルと此土地には不慣れな壯年が二人橇に乘つて後ろから來ると、馬が前の橇の積物に驚いて、暴れ出したのです。アーサさんは自分は好い鹽梅によけたのでしたが、子供たちの内一人がウツカリ馬の來た方に立つて居たのを見て、跳で行つて、子供を抓へた處が、どふいふ機か、自分が倒されたのです。

なんていい馬鹿な馬だか、僕、あの籠なんかちつとも恐かな

かつたもの。

とトムがいふのを聞いて、醫者は笑ひながら

あなたのお考へは今夜は余り英敏ではないですね、モウ寐待にした方が好のでせう。

ナアニ、僕今夜寐るもんですか、僕起てゝ、アーサ兄さんを看病するんです。

とトムがいふと、ホワイト先生はまた笑ひ出し升た。ルーセはなくもがなと思ひ、少しいう〱しながらトムを引立て、槇を取りに遣り升た。

今日の長い日も終に終りになり升た。子供たちは皆床に着き、母の快よく寐る仕度も整ひ、父はルーセと共にアーサを見に行升た。此夜着病にとて特志を以て來た壯年は此時床の側に居り升た。そしてたつた一言いつた言葉を聞いて一同安心して、アーサを任せる氣に成升た。

あゝいふ、聲は心切な心から出るに違ひはないから、みんなこれで一先安心されるよ。サアおまへはこれから少し寐る樣にして御覧、と父がルーセに夜の挨拶をしながらいひ升た。ルーセは父の言葉に逆はず、部屋へ行つて、祈念を凝らし升たが寐ると丈出來ませんかつた。

小説

かなしと聞し實事談
名と所はにかよへるを
とりて其儘に
と題しぬ

瘂番人（上）

ひさご

この夏、某學校卒業して故郷へかざる錦に、道すがらの紅葉の色奪ひて、秋のはじめに歸省せし大木茂、兩親は威風灼々と歸り車の輪のひゞき、とゞろく大地の土に歸してより早三年の年を經て、今日の愛子の榮えをいづくに見てほゝゑみてやあるらん、此父母が積善の余慶茂が身に顯はれて、こゝかしこに、とゞめられての饗應に、知ず〱七日斗をこゝに過し、あす出立せんとする前夜、村長の宅に別の宴開かれぬ、余興として茂が、をさな馴染の娘露子が彈つる琴の音、朗らかにうたふ聲を、時ならぬ鶯と賞へし一坐の老翁の言葉も、又たうち興ずる種となりぬ、その夜そこに泊し茂、何といふ事なく寐らであかせし曉方、村長役所へ來りて、我娘かねて東京へ留

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

學せんとの志願なりしが、よき傳手ゆゑ、あとより上すべければ萬事は君を見かけてたのみまゐらすに、妹ともおぼして指揮し給ひてよとひたすらにたのむ、いなむべき筋あらねばこころよくうけひきて先さきにと東京へかへりぬ、五日六日を經て露子上京し茂が宿ちかき神保町へ宿をさだめぬ、同行せし父念頃にたのみてかへりしにつけて、茂は弟保と共に左右に手をひきて野に山に遊びし事もおもひ出られ、心の限を盡していたはれば、露子も兄のごとかしづく、いづれよりいひ出るとなく二人の心の底にたしかなる望み出きて、いはれいはぬ中のたのしび相見る時には心おだやかならぬ事もおぼえそめつ、茂は猶暫し獨學して究むる以ありと勉學するいとまに弟をも某校に入塾させて親なき者といつくしみしがあやにくなる風氣に冒かされしがもとゝなりて腸チブスと變症し、病院へおくらるゝこと成しを、身づから看護せぬ心焦られに世は花の咲頃と成たれど心たのしからで、いとゞ思なやみて一日の中に二度迄病院に消息を聞に行日もあり、おのづから露子の方に遠ざかり、あすはとおもひたのしびていねし夜、フトおどろかれて目さむれば、半鐘の聲聞ゆ、立出て窓を明くれば、アナヤアナヤ、露子が宿の方なる神保町に火の手爛なり、時しも風吹あれて火事ヨ〱と叫ぶ聲々、急に遠近に起りて風下なればとて、この家にも人々さわぎ立、大木そのまゝに衣かゝげて同じ方にかけ行人々かき分〱神保町に至れば、露子が隣の家燒落る所也、へだてつる巡査の下くゞりぬけて猶近くにゆけば、露子が宿よりもの運び、出る人に多し、露子いかに、聞んと心あせれど事の混雜に人に人重なりてその人〱に近付べきすきなし、漸ひまもとめて立よれば、消防夫二三人して何やらくろきものかきてもて出ぬ、立よりて見んとする時、人死あり〱といふ聲す、もしやと前なる巡査かきのけんとしてつきしりぞけられし時メリ〱とものゝ崩るゝ音して茂は其まゝ燒落し棟木の下となりハット立煙に姿は失ぬ

露子〱と呼聲にふとめさめしやうなる大木茂、立上らんとすれば顔熱し頭おもく身の內火の如くほてりて苦痛はげし、側にしばしも去らでこゝに看護せし老女この有樣を見て少し目に涙をうかべ、心づき給しか、あやふき事なりしといふ、茂目をみはりて、こゝはいづくにやととへば、心おき給ふ所ならす、基督教牧師の家にて火災救濟所にあてられし所なり、數

多こゝにきたりし人々は皆それ〳〵引取にこし人ありしが、かの大火後、四日に成ぬといふ今日迄はげしき熱に現心なくおはせば、その儘に一人殘りたまひぬ、御家は何處ぞ、錦町の旅人宿におはせし大木茂樣とはたしかに其方樣なりやととふ、さてはさなりしか、人の志のうれしきにも常々いとふ耶蘇の牧師といふに何となく茂が心おもしろからず亡國の邪敎奉ずる人に惠みを受けしと思ふのみ先立て禮もよくはのべず、氣息くるしげなるをみて、老女は又た言葉をつぎ、けふは集まりの日にて大火の事に付後々の爲はかる所あらんとす、それにつきて時もきたりつれば娘に萬聞かし給へ、露よ〳〵と呼入、さては露子かと大木前後の考へもなく胸とゞろかれ、うれし氣にそなたを見れば、ほゝゑみて入り來る一人の女と眼を見合しぬ、誰ならんとおもふに老女はよびて、よろこび給へ御身が看護甲斐ありて今生氣にかへり給ひぬ、これは我娘にて露子と呼ばるゝなりといふ、嗚呼、露子とはあだし人なりけり、夢の如く露子〳〵と呼こゑ聞えしに枕元はなれで露子のありとのみおもふひしは他人なりけり、今見しに姿うるはしく、年頃も露子と同じ頃なるも、つらしと目をふたぎて又とは省りみず、片側の頰のあたりヒリ〳〵といたむを何やらん藥つけてかけし繃帶の上よりおさへておれば老女は立出て行ぬ、かの露子老女がありし椅子の茂が目の前にあるを少しかたよらせてこしうちかけ、まだいたみはげしくてやおはす、つよき熱のうわ言に露ヨ〳〵とのたまひしは妹君か、しか呼たまふに他人ならずおもはれて御看護の甲斐ありけり、警察へとひ合せ大かたはしり得たれど名は何といはれ給ひて御國は何處ぞ、親御樣へも妾より御有樣案じたまはぬほどにつげ奉らんかとやさしげにいふ、同じ名といふに猶よく顏も見たくおもへど又露子の事のみ心にかゝりて、ものとはるゝもうるさし、されど露子の樣聞かんに老女よりも、この人の方聞よしと目はふたぎながら、種々の御配慮今更御禮申上ん言葉もなし、われは兩親とくに死失せて由緣の者なければ國へしらせ給ふに及ばず、たゞ弟の腸チブスの病にて病院にあると、他に一人の知人あり、露子樣とは其方なりや、いづくにゐまひと聞ば、こは同國の人にて神保町の柏屋にやどりせしがいかに成つらん、そこに行てかく成しなりといふ、ナニ神保町の柏屋とや、年は十七八にて小柄に肥肉なる方なるかとせは

しくとふ有様心ならずと、細くはじめて目をひらき、その露子がいかにせしにか吾身の如く棟にうたれしか、かの見し人影はそれなりしかとあはたゞしくとひかへす、見しとのたまふはいづれにてなりや、大方は無事にのがれ給ひしなるべし、未だよく警察の調べもとゞかねばしれぬ人も多きぞといふがあまりに前にことなり落付たるにいぶかしく胸くるしく痛はげしくわれるやうにひゞく頭痛をおさへながら、もはや心もたしかなり、しれるそのたまはぬはいたづらに人を苦しまするなり、露子も怪我にくるしみてあらば、しか明かにのたまへ、又燒て死せしとならば、しか明らかにのたまへと此方もわざと落付て茂がいへば、ハラ〳〵と落る涙手巾にぬぐひもあへず、もしやと母共かたり合しが其露子様にまがひなし、いはでやまんとおもひしが、今となりていはぬもかへりてあしかるべし、露様子はあの夜煙にまかれ二階より飛おりられし時いたく頭腦を打ちてそこに息絶へ給ひしぞとよ、名も年頃も同じなるに新聞にて見て涙とゞめあへざりしが、實にしらぬ人にはあらざりしなりとて寐床に取つきてなぐさめつゝうちなくに、茂は目をふたぎて何ともいはず。

史傳

亞米利加洲發見者

コロムバス氏の夫人

コロムバスを紀念せんとて、今年はアメリカの都シカゴ府にて万國大博覧會を催ふす。我國も亦た多く出品せん。而して此の大發明家には、其後ろに聞えざる一大發明家ありて之を支配せりとの理を示さんが爲めに、先づ左の傳記を掲げめん。

夫れ世にクリストハー、コロンバスを言ふもの多けれどその夫人をいふものなきは如何にぞ。コロンバスの亞米利加を發見したるは古今未曾有なる歷史のうへの花といふべきに一女子が亞米利加を發見したるなりといはゞ聽く人これを烏滸よと笑はむ。さはあれどコロンバス夫人なくば、クリストハーは天地の間に何物をも發明せざりしあるべし。これをたとふれば、世の大なる惡業には多く女子の根底に潜むを見るといひ、大ある善業には女子の影をも見ずといふに等し。知らずや、コロンバスの事業のなかばまた夫人のうち

に宿りしを。

西暦千四百七十年のころコロンバスは「リスボン」に住めりこゝにてかれは有名なる航海者のむすめフェリパを娶りしなり。フェリパはその父に随ひて遠島大洋にいたりしことも鮮からず。ことに美術的の性質ありければその父の爲に航海の地圖を書き、あるひは航海日誌にその水茎の跡をとゞめたることありけり。

フェリパはコロンバスに嫁ぎて父の遺しおける圖書のたぐひを其夫の許に致したり。その父より受け得たる航海事業の嗜好をもちて夫の爲に非常なる同感をあらはし、その志を勵ましたればこそ、かの世にすぐれたる事業の成就を見るに至りしなれ。もしこの夫人なかりせば、かれの發見も一種の夢想にとゞまりしや未だ知るべからず。

見よ。かれらが「ポルト、サント」にしづかなる生涯を營みしとき、明暮フェリパはかれの爲に書を讀み、かれと共に學びその父の航海の經驗を物語りて遂にコロンバスをしてその目的のために非常なる勇氣を起さしむるに至る。

蓋しかれが壯大なる企圖の世の人に嘲られて四民のために指さるゝときと雖も、ひとりかれに同情をあらはしたるものありけり。「スペイン」のイサベラ女王が寶玉を賣りてかれの爲に巨船を購ひしときと雖も、尚ほひとりかれの爲に成効を祈りたるものありけり。

あゝ憐むべきフェリパよ。フェリパは遂にその夫の成効を聞くことなくして、幾夜か西の海空を眺めあかし、喜ぶべきおとづれを聞かざるまへ病の床にたゝずなりぬ。あゝもしコロンバスが亞米利加を發見したりとせば、フェリパもまたまさに亞米利加を發見したりといふべきなり。

園女

これは竹窓主之の筆の跡にして故俳壇の名人が遺跡を記せしものなり。かの秋色千世女などゝ立ちならぶべきはこの園女なりといふ。

園女は勢州松坂の人にして生質和歌をこのみ風流あり。俳諧また美津女を師としてその佳境に入る。

　夜あらしや太閤樣の櫻狩。

同じとき晉子が山茶の章と異曲同工、いづれか先なるを知らず。

手をのべて折ゆく春の草木かな。

負ふた子に髪なぶらるゝ暑かな。

あるほどの伊達しつくして紙子かな。

これみな女流の興象また稱すべし。惟中故鄕をいでて浪花にうつるところともに行てその妻となりぬ。あるとき蕉翁行脚してきたるときゝ、すなはち請招ひてもてなしけるに翁園女が敬恭にして禮あるを感じ、

白菊や目にたてゝ見る塵もなし。

とあるに、園女脇して、

紅葉に水をながすあさづき。

夫死して東武へくだり翁にしたがひけるが、翁沒して後はまた晉子によりてまなぶ。一年旅立ちて京洛を逍遙しまた江戸へかへり深川に在住して眼科をもて常の產となせり。友人琴風が記にいはく、「この女むかしより世事に疎く、袖下の紅絹を切りて下駄の花緒を調へ、張文庫の蓋を取て氷ながしに用るなんど、その跡かたもなき事も風雅の上の興なりけらし近き頃佛道に入て天窻丸めたれど眞中を十筋ばかり殘せるもおかし。これは唯一のむかしを恐るなるべし。かくのごときものゆへ禪理も悟道せしにや、みづから雲虎和尙にこたふる書中にも、

誰か見ん誰か知るべき有にあらず
なきにもあらぬ法のともしび。

その才氣すべて此の如し」と。享保八年六十歲にして名を知鏡とあらため、冠里公の母君に仕へ同じく十一年四月、六十有三にして死せりとなむ、辭世、

秋の月春のあけぼの見し空は
夢か現かなむあみだぶつ。

拔萃

○女學生の月經不調に就て

近頃の「醫事外科報告」にて、ペメー氏 T. A. Peamy は女學生に多き貧血より來る月經不調の病のとに付きて左の如く論ぜり

第一、女學生此症にかゝるときは必ず退校すべし又退校せずも勉強をなすなかれ

第二、毎日數時間新鮮の空氣の中に於て歩行又は乘馬すべし但し冬は勿論身躰を温保すべきなれど「コルセット」又は他の胸壁屈迫保護器を用ゆべからず、新鮮の空氣中に於ては直立し口を鎖して深く呼吸をなす樣にすべし此呼吸は少くも一日に二回と定め一回十五分乃至廿分間なるべし之れ貧血なる女學生に血液を改良する迅速確正なる良法なり

第三、毎朝起出たる時寢室と同じき温度の水にて手足と躰とに海綿浴を行ひ后ち通例の「タワー」(西洋手拭)にて摩擦すべし

第四、多量の乳汁と多量の肉を飲食すべし

第五、一日三回鐵劑の少量を苦味劑に併せて用ゆべし

以上の法を行ふときはたとい迅速の全治は得べからざるも遂には全治し再び勉學に身を委ぬるを得るの幸運に會すべし

之に反し女學生諸氏にして若し此法を實行せざるときは本證は漸々増惡し終に肺結核となりて死するや必せり。

○當世辨士演說速度概覽

(速記者第一號掲載)
(臼井喜代松)

表中◎標を附したるは五月十二日及十四日の日兩衆議院に於て選擧干渉問題に對してなされたる辯論の速度とす、其他は第一期以來第三期に至るまでの間に於ける辯論の速度なれば、今日に於ては多少の差を生じ居るも計り難し、讀者は單に速度の最高點と最低點とを知るを主として必ずしも個々に就ての速度を知るを主とせざるを可とす
表に記す所の速度は總て一分間平均なり、

演說者姓名	速記錄記載の行數	速記錄記載の字數			
島田 三郎君◎	八、九 (行)	三〇二、强 (字)	新井 章吾君	八、九 (行)	三〇七、强 (字)
井上角五郎君	八、五	二八九、	天野 爲之君	八、四	二八五、强
高梨哲四郎君◎	八、二	二七八、强	角田 眞平君◎	八、	二七二、
立川 雲平君◎	七、八	二六八、强	箕浦 勝人君	七、九	二六八、强
末松 謙澄君	七、七	二六一、强	長谷川 泰君	七、五	二五五、
岩崎万次郎君	七、四	二五一、	藤澤幾之進君	七、三	二四八、
大岡 育造君◎	七、二	二四四、强	片岡 直温君◎	七、二	二四四、强
末廣 重恭君	七、一	二四一、强	杉田 定一君	七、	二三八、
石田貫之助君	七、	二三八、	犬養 毅君◎	六、九	二三四、强
香月 恕經君	六、九	二三四、强	高田 早苗君	六、八	二三一、强
中野 武營君	六、八	二三一、强	栗原 亮一君	六、八	二三一、强
鳩山 和夫君◎	六、五	二二一、	後藤象二郎君◎	六、五	二二一、
大江 卓君	六、三	二一四、强	武市 安哉君◎	六、	二〇四、
三好 退藏君	六、	二〇四、	加藤平四郎君	五、九	二〇〇、强
古市 公威君	五、七	一九三、强	白根 專一君	五、六	一九〇、强
樺山 資紀君	五、	一七〇、	野田 豁通君	五、	一七〇、
平均	七、强	二三八、强			

若し以上の調査を基とし、一字平均二音と假定するときは島田三郎君は一分間平均六百四音强、野田豁通君は三百四十音强の割合なり、而して總平均の割合左の如くなるべし
平均一分間　四百七十六音

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○學校兒童の衞生

大日本教育雜誌五月三十日發の分に、三島通良氏が右題號の演説大意を載す。其中に言あり、

小兒の衞生に、飢に失する者あらざれども飽に失すると多し、約言すれば、育兒法の原則は、注意して放置せよと云ふにあり。

兒童の就學の期又は課業の多少は、決して年齡によりて定む可きに非ず、之が標準を其發育何如くに取るべし。

獨國伯林府の市立躰操所長ドクトル、アンゲルスタインが躰操及び遊戯に關する問題に付きて演説せるものに付き注意すべきの點は、

一　午后の授業は完く之を廢すべし
二　自宅の稽古は愈々制限すべし
三　一週内一日の午后は必らず自宅の稽古を廢すべし
四　毎週内一日の午后中級及び上級生は二時間續きの時間を以て構内又は市内の遊園其他郊外等へ透引して躰操又は運動會をなさしむべし
五　夏日に於て躰操は可成覆ひある塲所に於てすべし
六　躰操及び遊戯塲には惣て運動の妨害さなるべき裝飾等を設くべからず。
七　遊戯の方法等は、戰爭事、駁走、騎馬等（其他は畧）
八　遊戯塲への出塲に際しては必らず軍歌唱歌等を唱へて行列すべし而して出塲及引揚げの時間は決して遊戯時間（二時間）内に算入す可らず。

以上の報告によれば、其上級にありてさえ午后の授業を全く廢すべしさなせり、予も實に之に同意す。自宅稽古を嚴にするものあり、豈思はざるの甚しきものならずや、尤も學校に於ける授業法の不完全なる間は之を矯正すると甚はだ難し。

○教育時論の女子の風俗

去十五日發兌の「教育時論」は、社説に右題の(一)を載せ、未だ畢らず、大意は、英米等の家族は法律の力によりて成立ち、我國の家族は倫常の力に依つて成立つの差異あり、而して我國の家族が倫常の力に依て成立ち來りたるは、一朝一夕の事に非ず、歷史上、國躰上に、深き關係を有する源泉なれば其風改良の責に任ぜんと欲する者は能く此邊の事を熱考して苟くも輕佻の擧動ある可らず」と云ふ。蓋し立詞の主旨此の一旦より發するものか。然らば記者は長篇の論文を草するに先たち、シウインク氏の「ザ、フハミリー」(家族論)などを一讀ある方然るべしと思はる。

家政

ホーム建設心得

井上次郎

新夫婦

こゝに佳人才子の手新たに結び、蜜乳月將に終らんとして、今やホームを實際に打ち建てんとするものありとせよ。其心得如何に。左に順を追ふて説き分けんと欲す。

地位

家屋を定むるに先だち、先づ地位を撰む。地位は、第一、主人の職業によりて變るべし、百姓は田舍、商人は市中と云ふが如し。此等當然の撰み終りたるのちは、家族の趣味と云ふものに隨ひて地勢を決す、此方の好むところ、彼方の好まざるものあり。或人は隱れて靜かなる木影を愛し、林の中などを撰めど、又或人は上の上、日あたりよき快濶の所を好む。此等はそれ〳〵の好みに隨ふべきもの也。景色は開化繁昌と共に變りゆくことあり、山か川か湖か森かほとりに居る時は、景色容易に變るまじ、其他は開くるに隨つて變化するもの也。地質の事もよく考へざる可らず、濕地に居れば到底躰を痛め

一七

一生短命となる、水ハケの好き所ろを肝腎とす。小山ならば頂上より少し下を擇め、方角は南東を好しとす。成べくは五十年以上年を經たる巨木大樹二三本ある所を求むべし、彼は其地の先住者なり、松と昔しの友あらずば何如にさびしからん。扨て、次には便利の事を考ふべし、道筋は、何如に主府への遠近は何如に、道路の修繕、車のかよひは如何に、郵便電信局への距離は何如に。大概は大道に沿はんより、大道より少し横に入りたるあたりを好とす、塵は少なく、價は安ければ也。尤とも家賃の少々高きは夫丈なれど、物價の高き邊りに住はば、一年中の損耗數へがたきほどに多からん。

庭つくり

既に地位を撰定したるのち、家屋の周圍の庭のつくり方大切なり、家は家屋丈けにて愉快なるものに非ず、過半は其周圍の庭のもようにて變るなり。庭の作り方に、三種あり、正規則風(茶坐敷風)と、不規則風(田舍風)と、其間とあり、西洋にては、庭の作り方は一科の學問とし、此三種の別を稱えて幾何學的風(GeometRical Style) 文人畵風 (Picturesque S.) 及び其混淆とは申す。一は、徑を直しくし、區劃を明らかにし、植込は方又は圓ろくし、すべて規則正しくするなり。二は、文人畵か、田舍風にて、取つくろはざる所に趣きを寄す。二者を喩ふれば、活花の、遠州流につき込とあるが如し。而して第三は其間なり。扨て、三のうち何れを取らんかは、人々の好み、家の作り方、土地の景況などにて決すべきもの也。

家の周圍

家の周圍は、家の敷地より少しづゝ自然と下るやうに低くゝすべし、水の流れ宜しく椽の下に濕氣を滯らすとなからん爲めなり。平地の築山は面白からず、何如にすとも自然めかず、寧しろ相應の高低にするを好しとす。たゞ余りに大波の如く起伏せしむ可らず。門より玄關迄は、遠方より來る友の爲めなり、樂しんで道を好くし歡迎すべし。之を余り急に曲げる可らず。大切なる箇條は下の如し、家の周圍の草色は變りある中に意想の新らしきものあるべし、主人の心もちを現はすべし、質朴の中に順序あるべし、風景一致調和すべし、兎に角十分にて貧相ならざるべし、出來べくば便利よきほどに廣かるべし。

以上は只だ大躰を記す、后日一層細かき所ろを說くべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

コロンビヤ家政會

テーロア女史記

當年四月二十七日「シカゴ」の新室に於て家政會例會を催し申しそろ。なか〳〵多人數の出席者にてめづらしき議題も出で候ひしが左にその景況を御知せ申上そろ「フール、ハウス」よりは無代にて家政會へ館内を貸渡すことに相成り、それにつき午前は料理部にて相用ゐ午後は家政教育部にて相用ゆることに致せしが、この家政教育部にて生徒を養ひ候につけては差當り當會より教師を雇ふことに相成りそろ。家政會本部なるスタレット女史より贈越され候手紙を會員の前にて讀聞かせられ候ひしが同女史の考へにては一弗乃至二弗程の會費に見積りて凡そ五千名の會員は得らるべくと申され、この金高にて家政會中央部と家政學校とを創立の見込の由にござそろ。又同女史の手紙の中に今月は實際の家政の爲にはたらく可き好機會なれば女子たるものはこれを失はざる樣一層精を出すべきことにこそと申越され候。

いかなる娘子にてもある家族の爲に六ヶ月以上奉公致し候ひしものは別に會費を取らずして會員と致すことに相成り、特別會員一同より尊重いたすことに取きめ申し候。

ハーバート女史は村會委員を取設け候方に熱心にて、これは共同の事業として新拓地に差向け候都合と相成り候。家政は世に最もうるはしき事業の一なりと同女史の申され候ひき、また會員の娘子にて音樂に望あるひとは自由に學び得る仕方を相設け、村會委員の爲に中央讀書室または中央懇談室などを設くることに相成り候。

その他ロード夫人の如きは熱心に家政學の必要を論ぜられ、これに次て社會學を研究致し家政の爲に發明致す可き旨を申され候。トランブル夫人は時といふものの家政に貴重なることを論ぜられ、ここに食物の料理を致さんとする前先づ時の料理を致すべき由、尤なる經驗と存ぜられそろ、その他申し述ぶべきこともあれどこれにて筆を省きづ。不宣。

雜録

遣ひ物の情

山下石翁

四季折々、又は御見舞の爲めとて、遣ひ物を贈り遣りする風習に好ましからぬあり。凡そ遣ひ物は眞心を示す手形なり。金貨を代表する紙幣にさも似たり。故に后ろに此の實價ある正味の物存せずば、如何に夷の笑顔を現はし、大黑の豊さを吹聴すとも、もと只だ一片のうすき紙に過ぎざるべし。眞心と情とを欠きたる遣ひ物亦た斯の如し。

左れば、眞實に其情を他に送らんとする族は、右に述べたる忌はしき風習に倣ふものとして玉石混淆せられんとを耻ぢ、反つて何ものをも送らぬものなり、素手にて來り、質朴に挨拶し、眞心顔に現はれて其神聖なる情を示す人は、彼の大きやかなる玉子の箱を出して輕薄そこ〳〵なる輩らに比べて天地の差あり。

花と觀て枝ぶりの好きに心うかれ、さりとて后と觀ん人の爲に心うかれ、躊躇して而してのちそと一枝を折り携さへ來りたる、又は野の小さきスミレほゝえむ如くに見へて得ならぬ

心地し、何れをと思ひ迷ふて遂にトある一本を根こぎにし折紙に包みて以て歸りたる、たびの宿りに珍らしきものを見付け素より價安く量大きやかなるものなれど、珍らしきを見せんとて不便を忍び雲外万里を提げ歸りたる、又は手づから糸とり手づから染め手づから編み又は織りたるものなりとて恥らひつゝ心を凝めて差出すより、感切りたる時不肖なれど君を思ふて書きたるものなりなと云ひて墨の跡を贈り起さんには、千金も買ひがたし万鍾にも賣りがたし、夫れ山海の珍味東西の奇品をさがすとも自づから人の情を包み居るものはあらず。人の情は物の外にあり而して物に寓す。此の情を第一として珍重せざる徒らは、人を物品の下に置くあり、人を万物の靈に爲さざる也、友情を知らざる也。追々暑中に近づき、又もや例の如き遣ひ物に出で會はんかと既に腹たゝしかゝる品物を受けたる時、兎に角禮を言しむる可らざることそ苦しけれ。あゝ世は眞價なき薄紙の通用する所なる哉。

寄書に見ゆる新發明も亦た之に倣するより發したる戯れか又前年來答止會と云ふを立て儀式流の遣ひ物を一切廢したる連中あり大學の人多く之に屬す斯かる組合を立るの法も亦參考となすべし。

男子と女子の相違

或人　譯す

女子はその兒に祈禱を教ゆ、されど國を治むるは男子なり。
男子は「ステーション」の鐵道を運轉するに、
女子はこれに乘ることを好む。
女子は電信の伎術を知りて巧にこれを運用するに、
男子は電線を張り電柱を立つ。また鐵道線路をつくる。
女子は旅することを知り、たまくに詩を作るに、
素濫をして一分間に六十里を走らしむるものは男子なり。
女子はあきなひをなし篳笥着物の始末をなすに
男子は健腕をもちて道路の改正をなす。
女子は洗濯をなし、膳部をつくり、食物をにたきするに、
家屋を建築し橋を架すは男子なり。
嫁入の着物を作り流行の帽子を作るは女子なれど、
柔術をなし「ベースボール」の「バット」をさるは男子ぞ。
女子は赤兒を育ひこれに乳をのますに、
醫藥を買ひ療治代を拂ふものは男子なり。
女子は繪畫をもてあそび、風琴を彈じ、歌を唱ふに、
男子は三軍に將となりて大敵にむかふ。
女子は流行のことを語り衣服のことを談じ「リボン」の色をはなすに、
男子は鍬と鋤と鎌とをとる。
シエークスピアを吟じ聖書を誦するものは女子なるに、
東西に奔走して衣食の爲に苦身するものは男子なり。
演劇を見、舞蹈を催し、茶話管弦に日を忘るゝは女子なるに、
男子は汗を流して國の爲に劔を磨く。
女子は男子の友にしてこれに同情同感のこゝろを表す、
あゝ女子はきよらかなる愛の魂よ。塵の世の精よ。

問答

○ユウカリ樹

南勢一少女の名にて、前の號にあるユウカリ樹は何如なるものぞとの問あり、之は津田仙氏が初めて輸入し、明治十一二年の頃より日本に生え初めたるものゆへ、一地の邊に無きやも知れず、幹細く高くして、其葉香氣馥郁、よく惡氣惡病を掃ふと云へり。

○氣風精神

廣島の或る方より重大の問あり、迚も十分には答へにくけれど大畧申し述べ候。其問に、基督敎より生じ來る最良最善なる學校の氣風及び生徒の精神並に其養成法に付きて疑ふ、第一、氣風精神てふ事は實際今日の女子敎育には不用のものなるか、又は別段其養成の方法を講ぜずとも敎員の活模範のみにて充分なるものか、又は智育が遂に此を養成するの道なるか云々、氣風精神を養成するは、今日の女子敎育に必要なるのみか、万づ代迄もとこしえに必要なるべし、先づ精神なき女は死せる雛の如し、內助も、育兒も、家政も何事も、ハキとは出來申すまじ。氣風は其人特得の品質を現はす、之れなくては滿目茫々、見渡す限り、桃李梅櫻を一つにしたらんが如し、殘惜しきは幾干ぞ、左れば、氣風精神の養成は敎育中の尤とも大切なる所ろなり。扨て其養成法は何如にと云ふに、もとより智育にも關係すれど之のみにはあらじ、若し細かに言はば智育にも躰育にも德育にも美育にも關係すべし、左れど其うちの何れの一つと限るべきものにあらず、尤とも大切なるは、一校の中心たる先生の活模範にあり。基督敎より生じ來る最良最善の氣風及精神とは、眞のクリスチアンたる女となるにあり、例せば聖經中のマリアの如くなるにあり、兎角圭角ありて客氣なくては精神熾ならぬものゝやうに思ふは近頃の誤りなり、中にも女子に就て此の瞥見を懷くときは一層危ふし。

○迎春行

迎春行のつゞき何如んとの問合せあり、汗顏の至りなり。旅中は船の中、車の上、港の待合ひなどにて認ためたれど、歸宅后は書齋の內にてすら最早書き起す勇氣なく、何やら與に見棄られし心地にて、筆をとる元氣なく候。御免あれ。何時

かは思ひ出し、末を結ぶべく候。

文藝

阿佛尼詠詞十八首

ひまおほき不破の關屋はこのほどの
時雨も月もいかにもるらん。

かりの世のゆきゝと見るもはかなしや
身をうき船の浮橋にして。

鳴海潟和歌の浦風へだてずばおなじこゝろに神もうくらん。
住みわびて月の都をいでしかどうき身はなれぬありあけのかげ。
たび人のおなじみちにや出でつらん笠うちきたるありあけの月。
こえくらすふもとの里のゆふやみに松風おくるさやの中山。
雲かゝる佐野の中山こえぬとは
みやこにつげよありあけのつき。

淸見潟さしふる岩にこさゝはん
なみのぬれぎぬいくかされ着つ。

心からおりたつ田子のあまごろも
ほさぬうらみと人にかたるな。

あつまぢの湯坂をこえて見わたせばしほ木ながるゝ早川のみづ。
ゆくりなくあくがれ出しいざよひの月や後れぬ形見なるべき。
たびごろも涙をそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらん。
消えかへりながむる空もかきくれてほどは雲井ぞ雪になりゆく。
おほろなる月はみやこの空ながら
まだ聞かざりし濵のよる〳〵。

わられしを都の月を身にそへて
なれぬ枕の波のよる〳〵。

知らざりし浦山風も梅が香は
都に似たる春のあけほの。

花盛ながめてわたる浦風に
かすみたゞよふ春の夜の月。

あづまぢのいそやまかぜの絶間より
なみさへ花のおもかげにたつ。

寄書

○遣ひ物新發明

世事方外

此頃は遣ひ物に追々新工夫あり、昔しの如く重きものを携さへ行かずとも、切手と云ふもの出で來甚はだ重寳なり。然るに今の世に於て、尙ほ鷄卵の箱などを持ち廻るものあり、此より彼へと追々順送りに贈りて世辭を濟ますうち、箱の中にて雛の孵り出づるともあり、至つて不便なり。此等は何故へ切手にせざるやと不審はれず、近頃は蕎麥の切符より、新聞雜誌、鐵道人力も切符にて遣ひ物にす、重寳の至りなり、然し其工夫の未だ至らざる處あり尙ほ經濟の考へなきものと存ぜらるゝは、どうせ先より先へ切符にて送り中々本元に行て現品を貰ふよなきに於ては最初より金を出し現品の切符と爲すに及ばず、金何圓何錢の爲勢劵として之を遣ひものとし、先より先へ段々通用する工夫にもならば宜ろしからんと工夫す、此の明案如何のものにや、世上に問ふもの也。

○取次と主人

龜井ゆき

受付取次は主人の評論の基ひに候、たとひ温厚丁寧の主人な

りとも、其取次受付にして粗暴ならんには好き評判を受けると覺束なく候、よほど用心すべきものと存じ候。

○改良食に就ての懇願

鷺の巣の主人

食物改良論は百度も聞きしかど、改良食の出來りしを一度も見申さず候。若し輕便と滋養と佳味と一般に實行し得べき改良食の發明を成す人あらば、コロンブスのアメリカ發見よりも大した事と信じ申候。夫れ御婦人方にして此の榮譽ある大發明に奮發し給はずば、何れの日にか改良食の恩澤に預かり申さむや。論説は男子より聞くべし、之が實行は御婦人方の榮譽の特權と信じ居るものを。

されば各女學校にては料理法の學課もあり、且つは女生方が自炊して學び得たるところを實地に研究せらるゝとも聞き。又た大日本婦人衞生會の如きは夙に此事に熱心せられ、會員相互に廣く和洋を折衷參考して、食物改良と新料理法とに研究を凝らせらるゝと承り。兩つながら一方ならぬ喜と望とを寄せ居り候へしが、爾來新發明の追々と得來りて幾多良好の結果ありしとと存候。就ては輕便にして有益なる改良食と料理法の御發明をば、當紙上にて御披露の榮を得度く、併せて世の實驗に富み給ふ姉妹方にも懇願申上候。

女報

畜勦子編

●皇后陛下　陛下には曩に仰出されし如く一昨日午後零時三十分御出門隅田川上流に於て海軍將校の催に係る端艇競漕會へ行啓あらせられ侯爵德川篤敬氏邸に於て暫時御休憩御覽所へ出御、競漕御覽の後午後五時十分還御あらせられたり、御陪乘は室町典侍、供奉は小倉權典侍、津守權掌侍、三上七等出仕、御先着は小池權掌侍、生源寺權命婦なりし。

●皇女御參内　皇女常宮殿下には昨日御參內皇后宮陛下へ御對顏あらせられたり

●孤女學院の內助者　婦人の隱れたる助は教會の命、家の命、國の命なり、編者陰ながら感謝に堪ざるは、角筈獨立女學校の生徒某女史さ、明治女學校の卒業生某女史等の助けなり。此頃院長大須賀君病を得て床にあり、三十余名の孤女が引き續き三人五人病を發す、此二女史は是れ等の看護婦たり、子守りたり、尉婦たり、而して是れ等が教師たるなり、冀ば孤女院の諸子よ自愛せよ。

●同志社女學校の卒業生　同校は今期に於て三拾三名の卒業生を出したり、同校の爲に祝す、今聞き得たる姓名を左に揭ぐ。

新規則卒業生（拾二人）

熊本縣　濵田ちき　京都府　長野ひさ　福岡縣　中山さく　京都府　南村ゐむ
福嶋縣　岡　すみ　宮崎縣　阪田いく　愛媛縣　重松實枝　岡山縣　白神さし
兵庫縣　竹内たけ　福井縣　山田壽雄　山口縣　山田さく　和歌山縣吉田すへ

舊科目卒業生（拾二人）

京都府　林　さく　滋賀縣　石黑　操　京都府　村山いさ　京都府　服部そめ
京都府　松本けふ　京都府　永井つる　京都府　田中さだ　京都府初鹿野さし
群馬縣　湯淺にゐ　山口縣　板垣せつ　愛知縣　小栗さき　兵庫縣横山とゆむ

看病婦學校（九人）

群馬縣　佐藤しつゐ群馬縣　山口さも　德嶋縣　齋藤みち　鳥取縣　永井なか
岡山縣　行本きち　岡山縣　柚本小松　和歌山縣谷村かつ　福山縣　栗原もさ
滋賀縣　西村きく

●赤十字社卒業看護婦　前號に揭載する處正誤を依賴し越されたれば左に正誤す

第一回　皆吉チカ　貞末マキ　曾家鑑爾　大越タマ　竹中スヘ　川勝タメ
吉柳ナチ　塚本トミ　太田ナミ　野村千代
第二回　高木ハル　西澤ミネ　川村モト　今井ヲカ　俊野イヲ　市川エイ
淺井ウメ　神藤タイ　中村アイ

●○○○風紀片々　此頃毎日新聞は、米國に於ける日本人の狀態を報じて渡米の本邦婦人の敗德を慨し第二の淸國が轍を蹈まむとを恐れ政府に注意を促せり、彼の報ずる所に因れば現今在米本邦婦人は二千名に垂れ、是等の者多くは政府を欺き、船員を欺き、彼地の官吏を欺き慈善家を欺き、殆ど云に堪へざるものあり、先頃郵船に投じ十四才と十六才の少女上陸の際米吏は之を淫賣婦と見做し、詰問せしに、水晶琢磨の職工なりと主張して、役人の不敬を責め遂に上陸するを得たり、其后一二月を經たる頃政府は漸く注意の怠るを待ち、深夜姑獄を襲ひ彼の二少女を捕へ、次便に送り返せりと◎護教記者又婚姻論に於て痛論せり、彼れ曰我國は海外に對して掩ふべからざるの耻辱を夫の不潔不貞なる婦女より得たり、たとひ其他の百事に於て渾て万國に對して誇るべきも、若し姦淫國の名を以て冠せざるを得ずむば、是れ堂々たる旭陽の國は腐敗せるなり、結節癩に罹れるなり道德に死せるなりと◎基督教新聞は、社會の改良と輿論と題し、二年前の廢娼論や宛も驟風の俄然として來るが如しと雖ども乍ちにして、晴空一片の雲なきが如しと、其說や基づく所廢娼は國民の輿論を喚起するにあるが如しと吾人說を喜ぶ◎岐阜日日は藝枝町設置を縣會に難づ、難つるもの獨り彼れ耳ならむや、去年の震災に棟下死灰中に骨を求めし者誰ぞ、飄箇は沈めて猶浮び易し嗚呼此縣民。

●女學生の風儀亂る　と云ひ、二三の新聞は、京都に於ける一二の女學生が結婚の行違生じたるとを喋々世間の女學生に論及す、其識見の狹なる笑ふべし、嗚呼天下に一の波瀾なくば、吾人は之れ太平樂の虫糞たる耳噫。

●淺井夫人　は現今大坂梅花女學校の舍監たるなり、同女史は曩に梅花女學校設立後最初に雇はれたる女教師の一人なり、同夫人は性質正直にして其行爲に規律あり、其職務を重じ能く力を盡し萬事に親切なる人なり、是れ櫻井近子女史が數年夫人と同居して得られたる所なり、梅花女學校に於て斯る夫人を聘せられたるは、同校生徒の爲めに賀すべきなりと櫻井近子女史の報道ありたり。

●婦女の龜鑑　豆州賀茂郡松崎村江奈に其名も緣の色變へぬ常盤町とて靑松一帶戶々楯を連れたる其中に住める土田雪子（三十五）と云ふは今より數年前きか（十三年）のう（十一年）かく（九年）の三女を遺物に所天の死去したる以來若寡婦の獨身はさぞ淋しからん女一人の手にて三人の小供の養育は中々容易の業ならず相應しき良人を周旋して進ぜんと勸むる親族も多けれど一切謝絕し貞操堅固に永の年月變ることなく儼然婦德を正ふして只管子供の生長するを樂み敎育の如きも世の親々とは違ひ二人の娘をば現に松崎高等小學校に入學せしめ家庭の世話も寬嚴宜しきを得早く長女が成人して善き婿を取り恙なく相續するを見て安心せんものと所天の多くもあらぬ遺產を失はずして他の救助を受けざるが爲めには身躰の瘦衰るゝをも忘れ當年の如きも子供を相手として盛大に養蠶を爲し周到綿密なる飼育になどか其結果の惡しかるべき區內にて一等の成蹟を得たりと云ふ實に寄特の至りにこそ。

●無情漢　貸座敷營業主の無情强慾なる事は今更言ふ迄もなき事なるが、頃日杷憂生なる人より態々申越されたれば、聊か營業主の一項針に迄さものする一條あり、元來娼妓出稼の如きは最劣等の營業にして万巳むを得ざるの事情あらざれば其筋に於ても許可せざる筈なるに、營業主は無情にも彼等を餌として詐僞奸譎當通の人間として爲し得べからざるの方法を用ひ、救ふべからざるの境遇に陷る心根こそ惡みても尙ほ余りあるの所爲なり、よく彼等の內幕に進入して伺ひ見るに出稼娼妓程憫れ果なきものはあらじ、今假りに彼等が一家の經濟上より父母の命に反きかれ泣く／＼苦界に沈むも、本をたゞせば僅かの金に慾飽くなきの無情漢に籠絡せられて人間界に再生するの日はあらざる迄の撿制を受くる如きは、日進月步の世の中に金科玉條の法律ありて吾人が生命財產權利を保護しつゝあるにも拘はらず、此の闇黑界には彼等を救助するの破邪鏡なきかと慨嘆せしむるは何故なるぞ、噫二三の無情漢汝が行爲を反省悔悟せざるに於ては、聊かも取捨するなく汝の姓名をさへ記載して世の仁人志士に訴へんとす。（某記者）

●藝技廓設置　に就ては怪聞ありたるが岐阜市會に於ては、單に櫻町以北と決定せしが一昨日市參事會の手を經て小崎知事へ一篇の意見書を提出せりといふ、今其藝妓廓設置の場所を開くに、兼て本紙に記せし如く大佛北と確定せし赴きにて該地所たるや一坪三拾錢餘の價格なるを一坪六十五錢の相場にて旣に渡邊甚吉、川島治右衞門、野田文炳、熊谷孫六郎、箕浦宗吉の五氏が悉皆買占め居れりとぞ、而して愈々其筋より許可（旣に內約もあり）せらるゝ曉に至れば一坪三圓位に騰貴するならんとの評、御用紳士輩の一攫千金の策得て妙なり咄咄（濃飛）

●男女混浴の光景寫眞に取らる　長崎縣南高來郡小濱村は溫泉あるを以て其名高く戶數々百戶役場あり警察ありて繁華の地なり玆にひら湯とて海岸に築きたる浴場あり男女混合の上に別に圍ひとてなき事なれば裸躰の男女三々伍伍に起坐する樣如何にも醜くく心あるものは顏をそむけて通過することなり然るに先頃の事なりとか同港碇泊中なる某軍艦の士官數名には三菱社所有の瀛船彌生號を借受け小濱に至り此男女混合の浴場を觀て情知らずの軍人には如何にも奇觀なり國の土產となさんとて携へ居れる寫眞器械を取出して先づ一通り其光景を寫し後ち入浴し居れる數十人の男女に對し通辨を以て一同裸躰のまゝ其處に起立せよと命じたり事譯知らぬ田舍漢は外國の役人との事に命を聽かずんば如何なるうき目を見るも知る可からずとて馬鹿正直にも老若男女の別なく孰れも裸躰のまゝ思ひ思に立たりしに右の軍人は笑ながら此の光景を寫して立退きたりと云ふ專制治下に人となりし田舍漢とて從順にも斯る命に從ふは其愚直なる驚くに堪へたれども堂々たる警察署の所在地にして斯る國辱を受くるものあるを知らざるとは不可思議千萬の至りならずや右は通信に係るを以て其眞僞を知らずと雖も社友が先きに仝地に遊びたる折りに此事ありと聞きたれば十に七八は事實なりと思はる余輩は警察が斯る事に向て嚴重ならんことを欲すと長崎新聞に見ゆ。

●待合茶屋取締法　今度其筋にて風紀を矯正せんとの主意にて、見出しの通りの方法を設けらるゝ趣きなるが、其取締方法の一部を開くに、家屋の構造は旅宿と同じく其筋の許可を受け、何坪以上ならでは待合茶屋營業の出來ぬ樣の計畫にて、小さき淫賣宿曖昧なる待合は自然に廢滅させる考へなりと。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●長崎縣通信

長崎に基督教主義の女學校三個あり、一は舊教に屬し他は新教の有にして、共に居留地にあり。

◎舊教の女學校は　嘗て大浦天主堂の背後山深き處に一屋を搆へて多くは貧女孤兒を集め、家族的教育を爲し居りしが、昨年居を海岸に移して校舍を新築し以て其計畫を擴めり、目下佛國女教師三四人日本男女教師四五人專ら教育の事業を擔ひ居れり、生徒は（五六歳より廿三四歳迄）四十名内外にして擧動の靜順なるは著るし、余一日教師の扉を叩き全校に關せる意見の在る處を知らんと欲せる久し、頃は會々微恙を患ひ病臥五旬未だ其意を得ずして通信の職を欠けり、遺憾何物か加へん只だ寛量なる讀者の宥恕を仰ひで後報に讓らんのみ。

◎梅ヶ崎女學校　同校は一致教會の創設なり、科程稍々低しと雖も、着々其歩を進め能く教授の實を擧けり、當時生徒四十五六名多くは寄宿生にして、學暇間の朝夕薪炊の勞を負ひ、家政の一端を熟習せしめらると云ふ。

◎活水女學校　は九州屈指の女學校にして、美以教會に屬するものなり、位地を大浦の絶高に卜して地盤石搆恰かも城郭の堅丈なるが如く、家屋宏麗優に中天に聳へて、而かも足下は鶴首形の瓦溝に接せり、蓋し來客臨望の視線一茲に先づに臻ス、校は明治十二年米人ラッセル女史業を創めしより今に至る迄、實に十三星霜を經過せり、回顧すれば當時丁丑の變後人々恂々未だ其堵に安せす、僅かに一小學校を起すも容易ならざるに方たり、國を異にし風を同ふせざる而かも纎弱厭羽の一婦人にして、獨り身を挺して其衝に抗る艱苦豈に言ふべけんや、爾來一言一行悉とく東洋的思想の衝突となり、四圍增厭の火矢の中に立ち辛ふして月に一女生を得、又た月に一女生を得て一行一涙の間僅かに將來の希望を抱持し、完に今日の榮盛を見るに至りしは、蓋し千岳万峯の間濛々たる豁粒木葉の間を潜り、蟻蚌の足に遮へきられ忍辱久しきに耐へて、流々相集まり滔々走つて萬丈の堤を決するの趣あり、教師は米國婦人五名日本人男六人女四人にして、獻身專力只管上天の意に從ひ、内は謹愼以て賢良熱愛の婦人を出ださんことを希ひ、外は營々我黨の氣焔を吐くに努めり、之れによりて當時百九名の女生徒、全く聖恙の寶血に淸められて、一心同體となり首尾應動して學事に勵む、又處々に家屋を借り受け安息日每に近隣の子女を集めて傳道に從事せり、憐むべし間には或る筋の人々より色々の故障に遇ひ、憂慮慘痛經營刻苦して之を排拂し僅かに一條の活路を開らきて、屈志を伸はさゞるべからざることも屢々之れ有り、幼年の生徒は三人若くは四人を一隊となし市中十ヶ所に慈善教授所なるものを設け、毎日午後四時より七八歳の小兒を招きて唱歌を教へ、聖書の談話を爲し以て染惡の弊を防き、天眞の性を發揮せんことを勸め居れり、宜なる哉生等散步漫錯の折り〳〵子守の道を行きつゝ「イエスわれを愛す」なぞ唱へ行くものあるを見受ること屢々なり、嗚呼嚴本氏の所謂賣淫國の綽號を被りたる暗黑無明の洞窟中皡々たる皇鑑の光閃めき渉たりつゝあるは、實に我れ世に勝てりの一大奇觀を示すを得べし。本校は本年六月に第二回の卒業生（豫備科九名、初等科十一名、中等科五名、高等科八名、神學生三名）を出だすべし、因に言ふ高等科卒業生は或は福岡鹿兒嶋等の女學校に派遣せらるゝものあるべし、また全校に止まりて補助の任を負ふものあるべし、神學生は是れより天國の女軍に投じて九州の原野に轉次し血戰勇鬪すべしとなり。

●滋賀縣通信

◎住友製絲場　縣下坂田郡上丹生村にある同場は、目下百五十名の工女を使用し盛大に製絲せるが、工女は何れも熟練の者を撰み從て賃金も他よりは貴とくして製絲の如きも我邦の優等に位せり、主として直輸出をなし居るものにて地方の評判も頗るよろし。

◎長濱婦人會　基督教徒婦人の協力になれる同會は、未だ搖籃の姿を免かれずと いへども、聞く處によれば此度大に改良を加へ、每週一回の集會として信仰談、衛生談、經濟談、教育談、等それ〳〵專門の士を聘して一度つゝ各種の講談を開くことゝなし、已に一二回之を試みたるよしにて内田保子戸田柳子四川常子等專ら周旋の勞をとらるゝといふ。

●高知縣通信

◎育兒會　廿四年十月より廿五年三月まで高知育兒會に於て取扱へる育兒の數は九十八人にして、之れに要せし育兒金高は四百六十三圓三十一錢九厘、而して同會產婆生徒の取扱ひたる產婦は惣數五十九人にして、入室二十四人、自宅三十五人なりと云ふ、亦た同會附屬產婆學校に於ては、今般給費生七名自費生廿名募集中入學試驗は六月下旬執行の由。

◎小學校教員　本月高知縣學務課に於て縣下小學校教員、甲種撿定の上免許狀を下附せられたる教員六十九名の中、九名は女教員なり。

◎中村女子手藝傳習所　の近況を聞くに美術科生徒は追々上達し、從て日增に入學申込みあり、目下は教場の都合にて八十五名を限りあるが、尙ほ十五名位は增員する由にて、目下其詮議中なり。

◎高知女子傳道學會　自今第一學期の試驗中なるが、來る十九日閉校式を執行し、而して後生徒を各郡へ派出し、實地傳道に從事せしむる由。

◎高知英和女學校　同校の新築は七歩通り落成せり建築費豫算は二千余圓なりと云ふ。

◎高知縣尋常師範學校　公費生中來る七月に全科卒業の見込ある人員五十二名の中女子十八名なりと云ふ、

●三重縣通信

◎温故堂產科私學校　同校の歷來のことに就ては女學雜誌第三百十五號に報道せし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さころありしが、少しく誤りありければ、正誤かたぐゝこゝに再記せんに、同校は明治十年十一月に、今の校長山內養順氏が變則產科家塾てふ一小私塾をひらき、內は謝儀を徵せず外は妊婦を入院せしめ以て實地の手術に看手せり、されど始のを故生徒いさ多からざりしが、氏の忍耐さ盡力さによりて漸次八十余名の卒業產婆をみるにいたりぬ、恰も明治十三年七月、聖上の御巡幸あらせられ我地に蹕特さゝめ給ふや、岩佐侍醫家塾に臨みいさ奬勵を辱ふし、又明治十五年九月本縣を銀杯を下賜せられぬ、明治十六年十一月家塾をあらため溫故堂產科私學校さ稱し、教則を修正し規摸を擴張し、又各郡長の需めに應じ、志摩の鳥羽、紀伊の木の本、尾鷲、伊勢の山田、甲丸、五ヶ所、饋柄、野後、松坂、菰野、久居、龜山、及伊賀の上野などに支校を設け、いまや同校卒業產婆の總數實に七百有余人進んで內務省の免許を受くるもの三十余人に及びしさぞ。

◎海外新報

●エール大學の美擧　昨年開かれたる同大學自時會の決議報告によれば同哲學部に於ても從後高等學生が學理探究の便に具へ歷々同部の目的事業を確實ならしめんさて其方便を興へたり。第一着手の二法は來る此期より實施する處のものにして即本國中何れのカレーヂを問はず其卒業生にして同學に主願のものに限り同大學職入の內よりして二十名の貸費生（各一人百弗貸與）及五名の給費生（各一名四百弗給與）を募集教授するなり。今一の方法を一般高等教育を受けんさする婦人に取り特に未曾有の幸福たるべき事にして即次學年の終り若くは其中に於て同じく國中のカレーヂ卒業生にして哲學探究特志の者は男女を論ぜず就學せしめ凡そ歐州諸國に現設の光習貴なる學理研究場にも優るの好機を供するなり。エール大學今般の擧は特に婦人高等教授の爲め其實殖たるや明らかなり。而し其貸費及給費生募集により特に西方なる小高等學校生等が受くる處の幸福又大なりさ云ふべし

●萬國婦人矯風會事業の概略（第一、傳道部）萬國禁酒傳道の事業、聖書朗讀會、日曜學校の事業、慈善の事業、改良の事業、刑罰に付きての働、清潔を保つための事業、舟子間の働、巡查間の働、貧兒院の事業、牢獄の事業。（第二、組織部）青年男子間の働、青年女子間の働（第三、防護部）平和を保つための事業、中裁の事業（第四、教育部）學校に禁酒的教育を爲するための働、貯金奬勵の働、印刷物報道の部、（第五、社會部）集會の事業、博覽會の事業（第六、法律部）條約の事業、建白の事業、是れ萬國婦人矯風會事業の概略なり。

●小兒虐待保護會　マサチュセット州なる同會は過る年の報告に四千七百人の可憐の小兒を救護せりさ云ふ、而して愈々好結果を呈するの運を向へるも常時財政の困難を告げ爲に其美擧も大に遲疑するに至りたるを以て社會公衆に向て之を訴ふるに至りたりさ云ふ。

●日本給費女學生　米國に於て日本女學生を養生するは尤も適常なるをなれご之が方法を設け給費生を募らんさの義ボストン府に起れり、此擧は既に費府に於ても彼のブリンモーアカレーヂ醫學校或はドレキスレル職業學校等の如く四千弗の資金より來る歲入もて常に一女學生を學ばしむるの設けなごありて今新らたなるの事業にもあらずさ雖ども今此府に於て此好しき企望の起りしは實に祝ずべきの限にこそ。而して之を數年の過去の間に於て起りたりさせば未だ日本に其必要を見ざりしならん殊に當今は早や教育思想を之に起さしむるさ云ふの事よりも彼等は既に其要を知りぬ、又其實益を實收しぬ而して今は其教育法に於て新工夫を起せるの場合にて即最早や外國教師に直接訓導をさるゝよりも、本國人が此場合に與かるの最も適當なるを唱導するの場合さなり玆に於てか本國婦人にして此任に當るの必要を又引起せり故に此必要に我亞米利加國より助力を副ゆるをを特に至當の事さ覺ゆ。且つ該國にては當今保官的の思想再勃し古來の歷史等を引出して改進の氣を挫くの傾あり加ふるに其初より改進的の人士等も又外人の手に托ぬるを遲疑するに至れり蓋し其初め外國の風を消化し取捨するをに注意せず一意之に類似せしめんさせしより起りし弊害の反動なるべし此如き經過の後なれば今は本國婦人を米國にて十分に教育して此を本國に持返り實行せしむるに若かずさす。今費府なる給費女生取扱法は其撰拔生たるものは均しく教育熱心なる者にのみ限れり、七人の日本學生取扱委員なるものありて其一人は此發企者たる妙齡の日本婦人津田梅子孃にして且其主任たり。故に其撰擧は又女央一人の手にあり、第一回推撰は今秋にして冬期には得撰擧者を見るに至らん而して先づ初めは本科を修むるの豫備を學ばしむるの方法なりさ云ふ。此擧に關しての精細を告ぐる箇條は在東京なる適當の委員に托すさ云ふ。今津田孃自からに就ては女史又二十年前日本政府より送られ十年許の日月を米國に消し後歸朝せるに當時恰も女子教育熱勃々たるの時さて直ちに華族女學校の教師に聘せらる玆に數年の勤務の後再び二ヶ年の豫定もて學事研究の爲め米國に送られ即當時ブリンモールカレーヂに在學せらる。孃が初めて渡米せらるゝ時同じく他に二女史の來らるゝあり即一人は今の大山伯爵夫人にしてヴアサル學校を卒業せらる他の一人も均しく同校に三ヶ年の勉學の後歸朝良教師さなれり爾來漸々多くの婦人の來學して好結果を得たる少なしさせず。

日本國は今や此かる方法に於ては外人の方を要する時なり而して費府に於ても又ボストン府に於ても此擧起る而かも其主任たるや相互の事情に通曉し能く其必要に應じて此事を起されたる本國の婦人にして特に歸朝後も常に之が年報發出を一任し且ッ時機に乘じて之を公布し公　の利益を計り若ッも敢て政府の助力を受くるの望みなり自から奮起熱心さるゝの人を得たるは實に祝賀すべきをにこそ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

小引

幾本善治（未定稿）

（一）此女學は明治女學校高等科生に對して講述せるものゝ大意を筆記したる也。立論の順序義理なんどは、大抵此外に意見なけれど、例證に至つては、固より十の一をも謂はず、たゞ其大躰を示すものに過ぎず。

（二）此講義は、未だ世に廣く示す可き程の物にあらず、故に未定稿としてたゞ知人知友に配付し、其批評を請はんことを旨となし、曩にミミヲグラフにて第一冊を印刷したるに文字の鮮明ならざる憾みあり、且つ之を一讀するの榮を賜はらんと申込み、活版に附することを勸告せらるゝ君子多きにより此回より更めて本誌の附錄となす。

（三）毎月第二回の赤表女學雜誌に附錄とし、一回四頁とす。故に前のミミヲグラフにて印刷せしものより字數を多くすることを得。前預約者に對し必らずしも負かずと自信す。

明治二十五年六月

第一章

序

（一）明治二十一年の夏、田口卯吉君は、經濟雜誌第四百十九號に女學と云へる文字を、奇異なりとして論ずらく

又た女學と云へるも甚だ奇異なり、余輩は敢て學と云へる文字の眞正の字義を摘出して玆に議論せず、日本にては是まで漢學、和學、英學、佛學なと云へる場合にも此の文字を用いたれば學と云へる文字は隨分不定のものなることは余輩も之を許すなり、然れとも女學と云へる文字は余程新規なり、若し女學と云へるものあらば、余輩は男學と云へるものありて然るべしと信す、其れのみならず青年學、老人學、老婆學、なども有るべき筈なりと信す、世間何そ老婆學を起すの人なきや。

（二）余は當時之に答へて女學の解一篇を女學雜誌第百十一號に掲載したり、其大意に云ふ

女學は婦女子に關する一科の學問なり、其心身に就て、其過去に就て、其の將來に付て、其權利地位に付て、及ひ其現今に必要する雜多の事物に付て凡そ女性に特別關係ある凡百の道理を研究する所の學問なりと。

（三）抑も女學と云へる文字は、從來未曾有の熟字にして、明治十七年六月余輩が女學雜誌を發刊したるの日以來、初て世に用ひらるゝものとなれるなり。當初この文字を創開したるの旨意は、即はち前般の説述の趣きに外ならず。然るに此字追々普通となり、遂には女子の學問又は女子の教育と云へる意義に變遷し、大宮人が華族女學校生を奬勵あらせられたる御言葉の中にも、亦其意義にて使用せらるゝに至りぬ。文字の意義は漸次に變化するものにして、且つ其變化したるまゝ使用し差支なきものなれども、余は初より女學と云ふ一種の學問に多少の存意あるものゆへ、當年の精神を其儘にして、此は最初の意義を之に附し、女學と云へ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一科の學問めきたるものとして思ふ所の敍述すべし。

（四）女學の字解に對する余が答は、當時巖本が田口君の駁論にあへり、其比の經濟雜誌、輿論新誌、女學雜誌なとは、之が爲に甚はた賑かなり、引て國民之友、讀賣新聞なども之に一二の評を添ゆるに至りたり、蓋し女學と云へる一種の學問あるように言ひ初むるときは、何人も之を不思議に思ふべき筈なり、左れば一汎世人が之を不思議に思ふほどなれば、彌よ以て女學の一科を特標して、その眞理を顯明せざるを得す、そは女學の生するや、世上の所在境界に女性の分子を忘却し何事の中にもたゞ男性の元素をのみ主とするを遺憾とするに基ひするが故なり、

（五）古より、月は嘗て歎きたるをなし、其歎きたるものは只だ月に嘯ふきたる人間なり。花も嘗て怨みたるをなし、其怨みたるものは、只だ花を眺めたる人間なり。秋風のさびしきも、風は巳が儘に吹き、絕て自ら嘘唏するにあらず。木の葉の落つるも、己が爲にて、世の果敢なさを示ざんとにあらす、天地万象は翕然として調ひ、その自らに安んずと云へども、たゞ人その間に直立して、而して面を塗くし心を病ます、歌に云く

神の裏は草木にさへ　あまれく及び春と秋の
景色もたへにうるはしかる　中に人のみ罪にけがる

（六）故に現世は脩羅の巷の如く、亦古戰塲の跡に似たり、將に戰に臨まんと勇めるもの、戰に敗れて倒れたるもの、悲み痛はて亡せたる子の爲に泣のもの、凱人の凱歌に耳を聳つるもの、慘逆に笑ふもの、卑怯に泣くもの、雜然として混混す、莚に絲子を擧て、祝ふものあれは、彼處にラケルの歎きあり、銀燭明にして四海波靜の曲を朗吟する者を幽に耳にして樹陰橋頭より身を投ずるものあり。地を耕やして子孫の爲に美田を作るの勸あれば、肉を刻て血を塗らんとする兇賊の双あり。世は實に悲歡物と世話物との演劇を一時に演するが如く眞に亂雜不調子なり

（七）然れども、此は決して人世の自然にてある可らず。戰ふと云ふは平和あるゆへ也。憂ふと云ふは、安きあるか故なり。人世常に斯る亂雜ありて而して人の亂雜に安んせざる所以のものは、遂に人の大に安んずるを得べき大平和なるものゝ當に存すべきを證明するなり。ベーコン曰く黃金世界は過去に存せずして將來に存すと。基督の所云る平和の世は、必らずや后來に於て實見するを得べし。

（八）左れと、此の大不調和の世の中に於て、大に調和を守護し、高く調和の音を發するものあり、即はち愛と云ひ美と云ふものこれ也。而して愛と美との形を取りて世に現はれたるは、救濟、看病、學院、病院、傳道、敎育、ホーム、敎會、音樂、詩歌、繪畵、彫刻、等にして、據て其要の尤も多く人の上に現はれたるは即はち女性なり。

（九）神學者の說に、神は義なるもの及び愛あるものとせり、支那人の說に、天地間に陰陽の二元ありとし、日本人も亦久しく文武を兩道とせり。蓋し天地人の現象には、常に此の柔剛二つの性あり、相須ち相助けて圓滿の相を爲すものなり。然るに世開けず、人未だ進まざるときは、兎角に、一方の剛性のみ世に現はれ、他の柔性は陰るゝこと多きものなり。

（十）故に此柔性を世上に顯し、他の欠典を補ひて世を調和し圓滿の塲となさんには、前に揭げたる慈善傳道美術敎育の類を隆んにするにありゞ、而して之を爲すが爲めの方法の中、尤も、實際的にして而して尤も容易なるは是が女性の本質を育導開發するになるなり。

（十一）然るに、世人が女性を見るの眼識甚だ淺く、嘗だに之を家內の人となして廣く女性を万般の事務に紹介するの必要を知らず、例せば政治經濟の如き活事務理化、生理の如き諸理學に至る迄で、皆な剛柔の兩性ある事を辨まへす、隨て只だ男子のみの學ぶべきものと誤認するもの多し。

（十二）故に、先づ婦女子を生理上及び心理上道德上の諸點より觀察して、男子に對する其關係を硏究し、之に相等する敎育及び職業の何如を論じて當然の天職何處に存するかを考へ、之より引て、天地及び人世の愛と美との元素並に其の人類に於ける關係等に論及するは、頗ふる有益なるものと信ず、女學とは、此意義に於て、諸學科の學理を一科の目的に綜合適用したるものなり。

（十三）凡そ女學校の科程には、是非とも此一學科を備置かざる可らずと信ず、特に今日の如く女子敎育を初て行はんとする時に當ては、取分け此一科を敎授するの必要を見るなり。女子は何如程の程度に敎育すべきが、其地位は何如程の階級に置くへきが、諸外國に於ける女子敎育の結果並に現況は何如に、方今日本の女子に相當せる敎化は何如なるや等の實地問題は言ふに及はず、抑そも女性の天職は何如ん、敎育美術傳道、慈善等に對する女性の關係は何如等を論究し、遂に美との人世に於ける影響を考へて、人情は至高至大要求に對する天の則圓滿に存するを明にするは、極めて味あるをなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第二章

女の徳性何如

（一段）　序

人に男女の別あり、而して男女の性は、本來同じきものか又は同じからざるものか、其の今日に於ける狀態を觀れば、兩者の共に相異なるは言ふ迄もなし、さいへど、ろは人爲束縛の影響により久しふして、遂に天の性を曲たるものなからんか、今ま其本然の稟性に反り、元來男女は其質を異にするものなりや否やさ問ふに此に樣々の議論あり、今ま之を概括するさきは次の表に示すが如し。

- 不同
  - 優劣なし
  - 優劣あり
    - 男優れり
    - 女優れり
- 同　　同等なり

(二)、即はち男女の性不同にして、而して女劣るさ云は孔子の說の如し、女優るさ云ふは、コムトの說の如し、優劣なしさ云ふは尤さも進步したる說の如し、之に反し男女の同樣なり、故に同等なりさ云ふは、ミルの說の如し、左に一々之を列擧し且つ他の多くの同論者の意見を添へ錄せんさす。

（二段）

質不同にして格女優るの說

(一)、佛國實驗理學（ポシチビスム）の主唱者アウグステ、コムトは近代社會學の創立者なり、宇宙及び現社會の實況を調査して之に圓滿せる眞正の理法を研究し、此の理法に隨ひて社會の弊風を矯め、政治を改造せんさせり、深窮細考の末、千八百三十年其哲學の初卷を世に出せしが、爾來二十年更に沈思精査して遂に社會學本論を世に出すに先だち、俄然一婦人の愛情により非常の感化を蒙むり、其哲學に天の洗禮を受けたり、一千八百五十一年出版の其 System of Positive Poliy. の序文に云へらく

余が第一般の書作を擧りて后ち、其の第二般に移らんさするに當りては、深き永續すべき刺激を要することさ切なりき、吾が智力は其長日月の觀察の勞苦に勞れ果て、少年鋭氣の折に於けるが如く社會の景勢に慨して、心より主觀的に新意見を組織するなどの英氣最早失せたりき、此時に當り、余が德性の全躰復活更生することを切要したり、然るに玆に幸なるは六年前類ひなき天の使余が上に下り、人情漸化して遂に美なる迄に進化したる其結果を直ちに余に與へんさて來りたり……是れ即はち、ダマム、クロチルダ、ウバウ（Madam. Clo-til-de Vaux）なり、余は此夫人より人間の最高なる情を初めて與へられたり、余は道德上に於て復活したり……之より以后余が公にせる觀念及び格言にして、以上の歡迎を得んほどのものはな、此天人を心中に禮拜せしか爲めの感化による、……此の神聖なる、クロチルダが余が心の上に働きたる宗教上の感化の何如に大なるかは、余が初段の言行さ其后の言行さを比較する人の直ちに承知することさを得る所なるべし、……余がクロチルダに於ける愛情の切なるを見て余が愛は只だ一方に偏したりさ思ふ人もあるべし、左れど凡そ高美なる人情は皆な互ひに結合せるものなることさを知らんほどの人は余が他に對するの愛情は之が爲に減せず反つて何如に大に進步したるかを極て容易に承知せらるゝなるべし……余が十四年前に失せたる高尙にして優しかりける余が母は、啻に情の上に於るのみならず、余が實際の技倆並に智性上の能力に於る惣て大切なる品性を實に最初に與へ玉へし所ろの根源にてある也。然れども余は今ま謙りて白狀すべし余は實に母の價値さ母の慈愛（余の上に於ける）さが當然要求したるほどの愛情を之に對して感せしことなし、否な感せざりしのみならず其の感せし丈の愛情をすら近來の敎育に余り見せぶりて愛を現はすとの何如にも心ぐるしく之に傚ふさ思われんとの耻かしかりきなど云ふ眞ならぬ心によりそを實際に現はすさもせざりき、然るに吾がクロチルダを禮拜せしより此の方、遂に余が先の母に於ける尊敬の念を引起し來り、余が週每に墓場に至れる折及び每に祈りする折クロチルダの像さ母なるロサリー、ダ、ブニエー（Rosali ede Boyer）の像さはいよ〳〵新しく混し余が爲に一さなりぬ、左れば此の二の天の使余が道德上敎訓の初終を相共に指示し向后余が人話に對ある勸務を紀念せらるゝさき余さ共に記念せらるべし……尙之のみならず勞働社會に屬する一賤女にして余に勞働の務を爲したる一少女は余が爲に働らくさのみ思ふて其他を自ら知らざるうちに道德上完備せる驚ろくべきの雛形を余に示しつゝありき、彼女が信切に余に注意を爲しくれたるによ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りて、余に於る前の二天使の感化を更に復活せしめたり、もし故障のなかりせば余は此の、ソフヒエ、ブリチツト (Sophie Bilot) を余が養女となせしなり、………此の三の美なる女性によりて余に三の同情的天性を教へたり、即はち同輩間の愛着、優者への尊敬、劣等者の信切の情を與へたりと、

(二)、コムトは、クロチルダ夫人の感化を謝すること如此し故に其著書を之に、デヂケート(紀念の爲め著書を呈す)して云く

人の智慧と諸ば人の更生に大なる妨を與へたり情(ハアト)は惣じて人の調和的の進歩に尤とも必要なるもの也智慧は此の情に隨はざる可らず智慧の情に隨ふは其力を束縛せらるゝにはあらず、其の働らきの方向に善導せらる也……:此事の理を確めたるは、クルチルダの賜ものなり………吾等二人嘗て話しあへき吾等は考ふることにも働らくことにも勞れ果ることあり、左れど相愛することには決して疲るゝことなしと、吾等二人ば亦發見したり、凡そ敬愛の情を尤も完全にせんには性を異にする男女の間ならざる可からず、かくて全く競爭の念を絕て長へに一和すと、………腦と情(マインド、ハアト)とを完全に調和せしめざる人より決して大事出でず、男女の兩性共に力を合せざれば能はず………フエアエル(行けよ)變りなき吾が友よ、フエアヘル、吾が、セント、クロチルダよ、余が爲に妻の代わり姉妹の代わりとなり、愛する子供の代りとなりし吾が友よ、フエアエル余が愛する書生、余の眞實なる共働者よ汝が天の使の如き感化は向后殘余の余が一生を公やけに私くしに支配に余を推して完全なる方に進ましむるならん余が感情を淸くせしめ、余が思を廣ろくせしめ、余が行を高ふせしめよ云々

コムトは情に於て如此く切に、クロチルダの感化を蒙むりたり、而して其哲學に於ては何如の理由を用て婦人を重く優待するか、其哲學ノ第四章「女性の上に於けるポシテビスム(實驗理學)の影響」上に其理由を細論せり盖し社會を改造するには哲學者と實行者と婦人とを要す、即はち智と情と意思とを要す、而して哲學者は實行者を待たずんば其智を實用すること能はずと云へども實行者は亦之を奬勵する所の婦人の情を得ずんば勇を得ることなし而して哲學者の智も亦婦人の情の感化を蒙らずんば眞正當然の方向に進むこと能わず此故に哲學者も實行者も共に婦人の情を必要す、左れば彼等はこの婦人を尊重すべし更に之を禮拜すべし、婦人を本尊とし其德を禮拜するに至りて初めて人の情力あり社會の結合固かるべし、此に至りて人類教 (Religion of Humanity) と云へる宗教完備すと云ふなり。

(四)、而して智力及實行の力に於ては男子固り女子に優るといへども道德に於ては女子必らず男子に優る、現世は動物的の力跋扈するが故に男子女性の上に立つと雖も眞の社會に於ては男子女性を崇拜せざる可らず、人に情心を起さしめ以て其道德を高ふせしむるは全く婦人の感化による、初は其家に於て后には、サルーン(交際會場)に於ては一に婦人の力によるなりと云ふ。

(五)、而して祈りは人の眞心を發達せしむるに必要なり中にも男子の如きものに取りては尤も必要なり、左れど祈りには目的なかる可らず、故に男子は祈りに女子を崇むべし男子女性を禮拜するに至りて人類教初めて宗教となる、盖し人類の教祈禱すべきものは人情人類(ヒウマニテー)なり而して人情人類は女性によりて愚化せられ且つ發達したるものなるが故に則はち女性を此の無形なる、ヒウマニテーチ代表するものとして祈禱すべしと云へり。

(三段)

質不同にして格、女劣るの說

(一)、儒教は女性を以て男性に劣るとなす、古來其說極めて詳らかなり易の上象傳に云く、大なる哉乾元、万物資て始む、至れる哉坤元万物資て生ず」と男女を乾坤に配す、而して乾坤を天地に分ち之よりして位を上下にす。易の說卦傳に云く、乾は天也故に父と稱す、坤は地なり故に母と稱す。又其繫辭上傳に云く乾道は男となり、坤道は女となると。之よりして男女を天地とし上下とし陰陽とし剛柔とし、惣じて女性を男性の下に屬するものと爲し來る

(二)、儒教が女性を見る最初の解釋は之を坤とし、隨て地となすにありき、然るに既に地と稱して天の下に置くに至りしかば、文學上の意義實解釋となりて自から女は地の天より低きが如く男子よりも下れるものと認むるに至り之より以往際涯なき謬諺を生じ來りぬ

(三)、詩經の我行其野に云く

乃ち男子を生む之を牀に寢れ之に裳を衣す室家の君王たらん、乃ち女子を生む

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢

●年頃拾六才斗にて、就學熱望の女子あり、其家貧しくして入學する資力なし、故に何れの女學校かの學僕として、亦は篤志家大家等に於て小間遣にてもなし、勉强の時間を得修學したき者あり。

●年齡三十五六才にして、是迄幼稚園を設け保姆に充分經驗ある人にして、華族か亦は高貴の家に稚兒教育を望まるゝ方あり。

●身元正しくして健康なる三才の孤兒(男)あり

以上三件につき有志の御方は弊社へ御照會相成度候

教育學、女學の附錄廣告

小生が、明治女學校高等科女生に口授したる講義の中、左の二書に錄したるものは、些さか大方の是正を請度ものあり、且つ地方に在る女生にして其の筆記を見たしと要むるものもあれば、曩に簡易出版を用ひ、第一號を出版せし所印刷不熟練のため殊の外不鮮明に有之、依て本號より左の法により附錄として出版致すべし。

巖本善治

○講義錄

教育學 毎月第二甲の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄として出版す、憾らくは世上の意見を異にする君子の是評を請むとす

女學 毎月第二乙の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄とす、是れ年來一科の學を講するの必要を感じ一二の痛駁あるに抱らず之を講述す

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ペーヂ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……十
何なか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十四
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女體……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版

林學士 星野愼之輔君著

昆蟲植物金石 採集法

小形洋綴美本
正價金八錢
郵稅金二錢

目錄

昆虫分類
昆虫變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲器
刺針法
昆蟲運搬法
幼蟲類飼養法
葉とは何

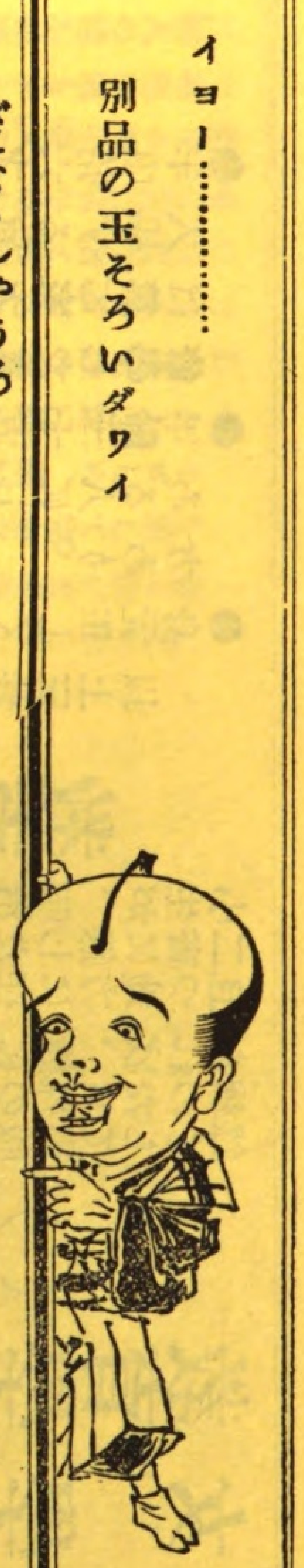
花とは何
枝とは何
植物
及樹木種名
採集すへき部分
採集氣節
採集器具
乾腊製法
標本製法
金石分類名稱

金石の現出
識別鑑定法
岩石分類名稱
土性分析法
採集器具
採集方法
地質觀測法
及ひ器具

木の間青み繁く蝶は野邊に舞ふ今や採集の期となりぬ請ふ一本を坐右に備へ給へよ。

發賣元 **女學雜誌社**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY



○玉掌露

一名玉のはだ　大瓶金拾錢　小瓶金六錢

抑この玉掌露は玉の如く透明にして中に香氣を含み皮膚を潤し艶を生ずる効能ある故に人々常に此露を手掌にたらし面部其外にぬりつくれば○のぼせることなし○はだあれず○日にやけることなし○きめこまやかになり白粉のなじみよく○にきび○そばかす○あせも○づさう其外總て悪きふきでものせず○しみを生ずることなく又寒氣風あらき時は此露を常より多く用ふれば水ゞかひすることも○ひゞきれず○しもやけせず四季ともに皮膚の艶美をたもつこと誠に無類佳品にして實に掌中の寶玉と云ふべし殊に三能しやぼんお遣の跡にてお用あれば尤も効能多し

笠原堂謹製　壹個　金壹錢五厘

此玉子ぬかは御婦人方つねに御用ひのぬかへ藥を加へ玉子にてねりたるものにて御用ひの節はゆにても水にてもしめし手のひらにすりおとし其手にて程よくはだにすりこみ手ぬぐひにてあらひ給ふべしおしろいのゝる事妙なり但しおつかひのあとは紅糸の所をかけざほ又は柱へかけおきいくたびもおつかひなされべし此玉にぬか一ッにて十日位ひお用ひ相成候御徳用第一のぬかなり

きめこまかになる

懐中良藥

たまかつら

紙製　一錢五厘
布製　二錢

一名上等づゝうこう

主治○づゝう○はのいたみ○うちみ○きりきず○ひゞしもやけ○やけど○りようまちす○其外諸々の痛所等によし殊に阿娘の頭痛に脳める津液を以て痛所へ用ゆれば即効を顯し暗に清香を發し宛も桃花の朝に露を賤き牡丹の夕に雨を過せるか如く自ら美人の粧を作す實に奇製の良藥也願は四方の諸彦御愛求あらんとを

○元祖色白くなる三能しやぼん　壹個金拾錢
髮のこやし毛のはへる香油一名美人かつら　大瓶卅錢中瓶廿錢小瓶十錢
日本一おしろいいらず白妙一名小町のつや　大瓶廿錢小瓶十錢

發賣元　電話番號四百七十二　東京銀座壹丁目つやふきん本家　佐々木玄兵衛

特約大賣勉強賣捌

下谷池の端仲町寶丹本舗守田治兵衛○車坂町さくら香本家堺屋重兵衛○淺草駒形町おなじみ小間物店中島百助○兩國廣小路米澤町五臓圓本舗大木口哲○村松町寶丹水本舗岩涙長造○元大坂町清婦湯本舗高木與兵衛○日本橋瀬戸物町玉のつや本舗玉置金八○馬喰町一丁目小町水本舗平尾賛平○十軒店本石町藥舗森谷萬次郎○四ッ谷傳馬町小物店山形屋定次郎○芝神明鳥居前藥舗岩本新兵衛○新幸町花いかだ柳屋○麹町三番町藥舗雨宮○牛込毘沙門前藥舗尾澤○麻布永坂町藥舗堀井

平和

毎月壹回發行

第壹貳號既發

平和は宗教界に於ける實際問題にして且つ今日の文明世界に大關係ある平和主義を唱道する目的を抱いて發兌する者なり夫れ人生の最後の理想を討究するは吾人の最も樂しむところにして戰慾の娑婆を撤去し圓滿なる天國を此世に來らせんとの希望は吾人の共に有つところなり普國の役に戰狀を實歷せしジョンス氏の慷慨なる演説は一、二、號に亘りて尤も純烈に尤も倜儻に戰爭の國家と人生とに如何なる關係を及ぼすべきやを説き平和の君の王國及ひ舊約と戰爭なる論文は聖書の上より戰爭を觀察す其他戰爭に關する統計と諸大家の意見とを掲載して號を逐ひ此問題に關する討究をなさんとす乞ふ人世を憂へ國家を愛し最高の理想を索めんとする人は宜しく此平和に來れ

平和 定價

壹部	三錢	郵税	二錢
六部	十七錢	同	十二錢
十二部	三拾三錢	同	貳拾四錢

東京下谷區車坂町五拾貳番地

發行所 平和社

自今 **浪華女學校** ト改稱ス

大坂府東成郡清堀村番外十四番

舊一致女學校事

私立 **浪華女學校**

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依賴に應し本會より派出致可申候

但地方へも差出申候●貧困者は無給の事

東京本郷區森川町壹番地第百九十號

慈善看護婦會

愛國

海を隔つる四千里、北米合衆國阜頭、自由の主義愛國の精神を以て、嚴法峻律の外不羈自由の地に於て、訕謗の論革新の評を試むるもの實に我週刊**愛國**となす。新日本、十九世紀、自由、革命は皆愛國の前身なり、此の如く文章屢々禍を買ひ數次の改題の煩を止むなきに取る、熱情寧ろ憐むべき也。今や在米日本人愛國同盟の地位の進むと共に愈々機關新聞の擴張を要するに至れり乃ち本國同志と謀り今回**邦文活字**數十萬を購入し來廿三日横濱解纜のベルジック號に搭載し、彼地に送達するの準備已に成る思ふに紙面の**改良**は來七月中旬より實行するに至るべし。冀くは本國の同胞兄弟姉妹、本紙を讀んで在米同志の意氣を酌め。

代價（郵税共） 一部 金三錢 一ヶ月 十五錢 三ヶ月 四十五錢 前金の事

發行所 米國桑港市愛國同盟内 第十九世紀新聞社

取次所 東京麻布飯倉片町 畑下熊野方

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

田口卯吉君序　故石川暎作君、故嵯峨正作君、金谷昭君　合譯
三木　實君、伴直之助君、

●泰西政事類典　再版　全五冊　定價金拾圓

右は原名「ポリチカル、サイクロペヂア」と題し英國ヘンリー、ヂー、ボーン氏の編纂に成るものにして行政、經濟、財務、商業、法律等より交際上の諸項に至るまで上、羅馬、希臘の往昔に溯り下、今日の現狀を審かにし原委沿革を歷叙し政治の事項殆んど網羅して遺す所なく政治域内の諸料に通曉するに於ては即ち復之れに若くものなき書なり

故文學博士中村正直先生序　經濟雜誌社編輯

●新版日本社會事彙　大本二冊　定價金拾六圓

此書は國初より明治の今日まで政治、制度、法律、理財、商業、工藝、風俗等、百般の沿革を統記し頭圖畫の今日に存するもの字を五十音は分ち索引に便ならしめ且つ圖畫の今日に存するもの大約之を挿入せし國家無二の寶典なり

故文學博士中村正直、香亭中根淑兩先生序　經濟雜誌社編輯

●訂正增補大日本人名辭書　大本二冊　定價拾貳圓

此書は本邦の帝王皇妃賢相名士勇將碩學高僧詩家歌人畫工巧匠等より俳優絃家俠客名妓等に至るまで凡そ名ある者は皆之を網羅したるものにして其傳記二萬有餘に及べり故に日本古來の人物を知らんと欲するもの此書より宜きはなし然り而して別に系圖及ひ年表を附す系圖の目は則ち皇統、親王家、藤原氏、平氏、源氏、北條氏、新田氏、足利氏、織田氏、豊臣氏、德川氏、繪畫諸流、淨瑠璃諸流、長唄、俳優、武術諸流、茶流、刀劍師、相撲、儒者、歌學、醫者、謠曲なり年表は則ち年號時代早見表及び大日本人傑年表なり

發兌　東京市京橋區彌左衞門町七番地　經濟雜誌社

不要保證金
不從豫約期

日本大辭書　山田美妙著

躰裁　大本　横六寸竪八寸　一頁一百〇五行　同字數二千一百　一冊平均二百頁　全部一千二百頁十二万六千行

全六册ニ外ニ**附錄一册**頁數百廿頁　**語數**全六册分**七萬言**（大槻氏ノ言海ハ全三万九千餘言）**釋義**ノ各特殊ニアル物**十六萬言**。**引用出典及證例二萬一千種**。

（一）第一冊ノ發兌期ハ本年七月十一日、第二冊ニ限リ八月廿日以後每月十一日發兌十二月ニ至ッテ完成ノ事。附錄ハ十二月十一日發兌ノ第六卷ト同時ニ發兌ノ事。

（二）**豫約期限**　明治廿五年七月二十日限リ。

（三）配達順序ハスベテ金圓御拂込ノ順序ニヨリ候。

（四）**特別豫約價並製**一冊前金四十五錢但シ此特別豫約價ニテ買ヒ得ルモノハ著者ノ關係アル新聞雜誌社等ノ會員、購讀者及ビ各地ニ在アル全國各教育會、新聞雜誌書籍又ハ著者一身ト親交アル公私學校生徒校員等諸氏ノ證ヲ添ヘテ申込マルル向キニ限ル事ニテ、即チ此等各位ガ年來著者ニ賜ハリタル眷顧ニ酬ヒンガタメノ微意ニ外ナラズ候。證ハ夫等ノ會費或ハ代金領收書、又ハ校印ニテ宜シク候。

（五）**第壹卷**ニ限リ見本トシテ特別豫約價並製一部金**卅錢**

（六）附錄目次、紙質及印刷見本、編纂始末、細則等ハ郵劵二錢領收ノ上進呈イタスベク候。

大辭書トシテ此**無比廉價**ノ物トスル爲ノ辛苦ハ實ニ豫想外ニアリ。其大要ハ編纂始末ニ述ブルト同時、著者ハ誓ッテ此辭書ニ關スル一切ノ責ハ殊ニ自カラ進ンデ任ジ、專心必ラズ完成セシムル事ヲ敢テココニ表白スル事。

東京神田區平永町九番地山田美妙方　日本大辭書發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

早稲田文學第拾七號目次

釋義

莊子　三島中洲氏
詩經　信夫恕軒氏
萬葉集　高山健氏

講述

論理學　大西祝氏

評註

丹波與作　饗庭篁村氏
マクベス　坪内逍遥氏

雜錄

詩人の徳義　野口寧齋氏

時文評論

唱歌の來しかた及び現在◎井上博士の文學談◎同漢詩和歌の論◎『城南評論』◎大早雲霓◎文學者の新題目◎地方書籍館◎雜報◎新刊

早稲田文學定價

一壹部　金九錢　郵税二錢
一六部　金五拾壹錢　仝十二錢
一拾二部　金九拾六錢　仝二十四錢
一廿四部　金壹圓八拾錢　仝四十八錢

仝　廣告料

一五號活字二十三字詰何行ニテモ一行ニ付金七錢
但シ學校書籍新聞雜誌ノ廣告ニ限ル

東京　專門學校

文學雜誌　城南評論

第四號

六月廿一日發兌毎月一回
一冊定價六錢六冊前金三十三錢府外郵税一冊五厘

莊周坐禪論　入道大夢
タトヘ釋　熊谷直人
趙甌北第三八を自負するの辨　野口寧齋
近世歌學評論　佐々木信綱
新躰和歌意見　惜寸暇文房主人
田舍源氏　謫天情仙
ミユース　新井虎南
四絃秋　森槐南
地獄溪日記　幸田露伴
那木の下葉　竹柏園
滑稽天帝に上る書　評論社飯焚の爺
醫界慨言　東日翁

芝區田村町六番地
發行所　城南評論社

第三號再版
正に成る

正札引なし

新形
流行

○はをり紐 品々
○帯留類 品々
○時計紐 品々
○メリヤス 品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗
日本橋區よし町
佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

產婆看護婦 本鄉區森川町十五番地 玉生くに

鈴木弘恭大人講述 附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢 郵稅四錢

御高評を得たる百人一首品切に成りたれば玆に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふを添ゆ、之によりて、百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶なり。

發兌元 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
大取次 神田區淡路町 敬文堂

賣捌店

○東京。瑞穗屋、丸善、小林、東海堂、武藏屋、東京堂、巖々堂、春陽堂、中西屋、布美乃屋、重陽堂、誠之堂○橫濱。丸善○京都。東枝律、大黑屋○大坂。福音舍、岡島、梅原○神戶。福音社○熊本。草野○函館。福音舍

●オールガン賣物●

右は金廿五圓にて買入僅か五ヶ月程使用物今度金廿二圓に賣拂度御望の方は。京橋區出雲町一番地警醒社へ御申越を乞ふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生第二十五號目次

百感雜筆
東坡、人を吟ず。評眼、誤評多し。迷大の人物。粘土流の愛。
嘔吐的の青年。不述、嘆而已で備、序、儉は青年の不實なり。

わが園
爲朝の古跡。式亭三馬。八丈の婦人。……蓄耡子

漫筆
終焉の辭……禿木子
亡き母を想ふ……明治女學校　櫻もゝ子

理科の話
梅雨の話し。山にか……某學士

詩歌の巻

文欄
さゝげまつる……淸流女學校　加納早子
春夜蛙をきく……女子學院　小出ちか子
庭のさまを寫す……廣島女學校　三石ひで子
靜女に勝れよ……梅香崎女學校　遠近田鶴子
地久節……立敎女學校　岡本もと子
琢磨……梅香崎女學校　安東梢子

博物の園
奇なる蜘蛛……某學士
ばけもの花(其二、終)……

昔話
心ぐるしき席。一年の雨。……

學びの栞
唐詩選の講義……

雅樂多
秘藏箱……

時の感
何事ぞや。若松、花圃、小金井、女史……

新報
文界消息。近刊雜書……

女學雜誌社

皇后陛下 明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻 譯

再版

(リツ・トル。ロード。フホントルロイ)

小公子

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネィ、と申したとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ざり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陷らふとする父の足をとゝめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼見に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故、此珍重すべきまろうどを尙一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頭なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尙ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。

一冊正價三十八錢。郵税八錢也

(批評) ○十一月十五日讀賣新聞○經濟雜誌五百九拾八號○巖谷季雄君○十一月十三日報知新聞○十一月十七日中央新聞○早稻田文學四號○國民の友百卅八號○十一月廿六日國民新聞○十一月十七日中正日報○亞細亞廿二號○護敎廿二號○下田歌子君○中島俊子君○石橋忍月君○一月十六日自由新聞

女學雜誌社

定期出版豫告

●女學生第廿五號は豫定の通去廿一日出版せり。
●通信女學講義錄第六號は來る廿五日出版す。
●教育講義は女學雜誌甲の巻第三百二十一號の附錄として去る十八日出版せり。
●女學講義は本號の附錄として出版す。

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穗屋卯三郎
同 錦町二丁目	武藏屋藤藏
同 尾張町二丁目	東海堂
同 彌左衛門町	巖々堂
同 表神保町	東京堂
同 出雲町	警醒社
同 南鍋町	指金堂
同 元富士町	盛春堂
同 雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣横濱市	共同新聞發賣會社
同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同 新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麹町區上六番町	日盛堂
同 三番町	梅仙堂
同 同	福音舎
同 飯田町	三文字屋
同 同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同 同	青柳堂
同 雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同 同	正導舎
同 肴町	深田彌兵衛
本郷區弓町	文字堂
同 同	競本堂
同 富士前町	解明堂
同 同	盛春堂
同 二丁目	青河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松嶋町	山口次郎
同 旅籠町一丁目	板本
同 鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本鄕町	鈴木絹兵衛
同 南佐久間町	栗原
同 同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
京橋區尾張町	鈴々木
同 出雲町	金盛堂
同	山田屋
本郷區天神町	改進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同 錦町二丁目	長故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

社告

女學雜誌第三百二十號より改正仕り本號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。為替は**麹町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割増の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金 拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部増さと定む。

發行所
東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY